堕天使に拾われた赤龍帝と白龍皇

花びら

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここに奇怪な運命が産声を上げた。

赤は家族を愛し、白は家族を憎む

獅子は忠誠を誓い、黒狗は全てを護る。

堕ちた天使がいずれ世界を制し、純白の天使は罪を犯し、汚れた悪魔は愚行を繰り返す。

これは人の物語でも人外達の物語でもない。

これは龍達と堕天使が織り成す希望の物語だ。

目次

邂逅・堕天使の総督 ―― 1
邂逅・白龍皇&覚醒・赤龍帝 ―― 9
混迷・白龍皇 ―― 20
決断・堕天使の総督 ―― 29
指導・堕天使の幹部 ―― 42
休息・堕天使の総督と赤龍帝後に白龍皇と幹部 ―― 50
1年後、邂逅・黄金の獅子王（？） 59
覚醒・黄金の獅子王（？） ―― 70
戦闘・獅子王VS赤龍帝 ―― 85
発見・偽赤龍帝 ―― 93
2年後、邂逅・邪龍最凶 ―― 102
来訪・女王と大英雄IN堕天使の組織 113
混沌・特定不可 ―― 123
婚姻・堕天使の総督と影の国の女王 133
3年後、会合・各神話の代表と一人の悪魔 ―― 144
休息・邪龍と天龍と龍王 ―― 158
談義・邪龍 ―― 173

邂逅・堕天使の総督

「ひっぐ…。うぇ～ん……」

夜遅くに、町外れにある山の中を一人の少女が歩いていた。

それも泣きながらだ。

彼女の名前は兵藤（ひょうどう）　一瀬（いちせ）、茶色の短髪で男っぽく実際に男勝りな性格だが……この時だけは違った。

何故なら彼女は家を追い出されたのだ。

齢１０歳で、だ。

その理由は突然現れた謎の少年。

自らを兵藤（ひょうどう）　一誠（いっせい）と名乗り、兄弟のいないはずの自分の両親を親と言った途端、彼女が突然と自分を赤の他人どころか忌み子のように嫌われた。

彼女は当然意味が分からなく、真面な思考ができない状態で両親から突然の勘当をされ、泣きながら出て行ったからだ。

彼女が歩いている山はよく自分が遊んでいた場所で、ここに来ると何故か心が落ち着くのだ。

高度は五十メートルもないのですぐに頂上に着き、その付近にあった自分が座れるぐらいの岩を発見して、彼女はそこに座った。
頂上は少しの岩しかなく、木々は道中にしかないので、視界を遮るものはない。
ふと、泣くのをやめ空を見上げる。
そこに広がっていたのは星の海。
まだ春なので天の川ほどではないが、それでもかなり綺麗に見えた。
彼女はなんでこんな事になったんだろうと考える。
悪いことはしたことがない。
寧ろ、正義のヒーローに憧れ、困っている人を助けたり、他人をイジめるいじめっ子達を成敗したり、ゴミを拾ったりと……かなりの善行を積んでいた。
だが、彼女は自分を責めていた。
自分が悪い子だったから？
自分がお母さんとお父さんの言うことを聞かないいけない子だったから？
学校の成績がよくない頭の悪い子だったから？
……彼女は優しすぎた。
そのせいで誰かのせいにする事などなく、寧ろ自分を攻め込むほどに。
恐らく、彼女が真面目に育っていたなら、正義感や優しい心を持つ彼女ならば弁護士

になっていただろう。
だが、ここでＩＦの話をしても意味が無く。
彼女は放心しながら夜空を見つめ続けていた。
そんな風に辺りが静寂に包まれていた時、突如として謎の音が聞こえ始めた。
ぐちょり、ぐじゅり……ブモォ！
彼女はその音に何も驚くことなく、そちらを見る。
そこには全身傷だらけの醜い化け物がいた。
顔は牛で体は巨漢。
まるでギリシャ神話に伝わるミノタウロスのようなものがそこに這いつくばりながらこちらを見ていた。
いつもの彼女なら発狂していたはずだが、既に絶望しきってる彼女は……ほほ笑んだ。
迎えが来たのかな…。
失うものがない彼女の心は、既にぼろぼろでいつでも死ぬ覚悟はできていた。
だから、その異形に勝てないのは見た瞬間から悟り、死を受け入れた。
一方、ミノタウロスの方は歓喜していた。
このミノタウロスは〝はぐれ悪魔〟と呼ばれる主人殺しという大罪を犯した者の一

人で、ランクはAだ。
彼にとって人間は餌でしかなく、そこをわかり合えなかった主人を彼は殺したのだ。
そんな彼の好物は女児の肉だ。
女児の肉は柔らかく舌触りも良いらしく、自分が逃げた先で見つけられたのは僥倖だと思ったからだ。
しかも少女は騒ぐことも助けを呼ぶこともなくこちらを見ていたので最高の状況と思った。
ちなみにこのミノタウロス、偶然にも他の悪魔の眷属に見つからないように逃げてる最中にとんでもない大物と出くわして、そいつから必死に逃げたのである。
だから、逃げ切るためにも、目の前の少女を喰らい体力を回復させようと立ち上がり、猛ダッシュで少女に手を伸ばした瞬間。後一寸と言ったところで彼は吹き飛ばされ、絶命した。
少女は、目の前で倒れたミノタウロスが死んだことに気づかず、ただ倒れただけのように見えたので、少し死ねなかったことを残念がった。
だが、今度は誰かなと思い、ミノタウロスが吹き飛ばされた方向とは反対のほうからビームみたいなのが見えたので、そちらを見る。
そこにいたのはスーツを来たハンサムなおじさんだった。

前髪辺りだけが金髪でそこ以外は黒髪という、不思議な人で少なくとも日本人じゃないなと少女は思った。

そのおじさんは彼女の方に気付くと、こちらに走って来ては心配そうに話し掛けてきた。

「よお、大丈夫か？お嬢ちゃん。怪我とかはしてないか？」

「……ありが……とう…？」

彼女は何故心配されたのか分からなかったが、礼を言った方が良いと思い、そう返したが……あまり実感が湧かなく疑問形になってしまった。

すると、おじさんは少し笑い、再び話し掛ける。

「ハッハッハ！なんで疑問形なんだよ。……いや、それはいいか。んな事よりお嬢ちゃん、こんな時間にどうしてここにいるんだ？親御さんが心配してるだろう？」

おじさんは少女について何も知らない。

だが、彼女は本来帰るべき場所を失ったのだ。

だから、自分でも聞いたことの無いような声が聞こえた。

「お家はない……。追い出されたの……。もう私に帰る場所なんて……ない……グスッ」

自分とは思えないほどの弱々しい声だった。

しかも話してる最中に感情が戻ってきて涙目になってしまった。
おじさんは何かを察したのか、彼女に優しく話し掛ける。
「お嬢ちゃん、ならおじさんに話してみてくれないか？お前さんの悩みを解決できるかもしれない」
彼女はその言葉に大きな反応を示し、もしかしたらこの人ならと思い、ポツリポツリと話し始めた。

話が終わると、おじさんは彼女にある提案を持ち出した。
「なら、お嬢ちゃん。うちに来ないか？」
「あなたの……家…？」
「おう。行く当てなんてないんだろ？実はなおじさん金持ちなんだよ。お前さんが１人増えたところで何も問題ないんだ。それに俺ならお前さんを強くできる」
〝強くできる〟という言葉に彼女は内心で繰り返す。
自分が強くなれたら、お母さんとお父さんを元に戻せるのかな…？
彼女はおじさんにそう聞くと、こう返してきた。
「勿論だ。お前さんが強くなれば両親を取り戻せるかもしれない。両親を取り戻すまでも構わないが俺はお前を強くしよう。さて……どうする？」

彼女からしたらそれは一縷の希望だった。
おじさんは彼と関係者である可能性は少なからずあるが、ここで彼の提案に乗らなければ、自分は野垂れ死ぬのは分かり切っていた。
もしかしたら、付いていった先で酷い目に遭うかもしれない。
けれど、これは絶望しかない自分にとって唯一の希望なのだ。
彼女は決断する。
「よろしく……お願い…します」
「そうかい。なら、行くぞ」
「え?ちょ、は?」
彼女が頭を下げておじさんが快く承諾したはは良いものの、彼の言葉が終わると同時に地面が光り出し、光が治まったと思ったら、景色が変わりどこかの屋敷であろう部屋の中にいたのだ。
何も知らない少女からしたら、訳が分からなく困惑するのは当然だろう。
その様子を見ていたおじさんは彼女に向かい合い、口を開く。
「ようこそ、お嬢ちゃん、神の子を見張る者(グリゴリ)へ。俺はここの総督をやっているアザゼルっていうんだ。よろしくな」
ここに奇怪な運命が産声を上げた。

赤は家族を愛し、白は家族を憎む
獅子は忠誠を誓い、黒狗は全てを護る。
堕ちた天使がいずれ世界を制し、純白の天使は罪を犯し、汚れた悪魔は愚行を繰り返す。
これは人の物語でも人外達の物語でもない。
これは龍達が織り成す希望の物語だ。

邂逅・白龍皇&覚醒・赤龍帝

兵藤一瀬は堕天使の総督アザゼルに連れて来られ、ここ神の子を見張る者に付いた後、軽くお互いに自己紹介をした後に、アザゼルのベッドに寝た。

というのも、アザゼルが明日の予定などを話そうとしたときに一瀬に限界が来たのか、事が切れたように寝てしまった。

アザゼルは仕方ないなとぼやきながらも自分のベッドに一瀬を置き、ベッドは一瀬とアザゼルが一緒に寝ても問題ない広さだが、アザゼルは彼女をゆっくり寝かせたく、自分は壁にもたれながら寝る事にした。

◇◇◇

あれ……ここは…？

初めまして、兵藤一瀬です。

目が覚めると知らない天井があり、上半身だけ起き上がらせて辺りを見回しますが、誰もいません。

確か……昨日は……!!
そうだ……お父さんとお母さんに捨てられたんだった。
それでいつも遊んでる山に入って、頂上付近で変な化け物に襲われてたころを、謎のおじさんが助けてくれたんだ。
名前は確か、アザゼル。
なんかの総督をやってるらしく、どこにも行く当てのない私を拾ってくれたんだ。
私は……これならどうなるんだろう…。
人体実験とかさせられるのかな…？
せめて痛くないのが良いな。
私がそんな風に考えていると、不意に部屋のドアが開かれた。
入ってきたのは、アザゼルさんだった。
「よう、目が覚めたかお嬢ちゃん」
「はい。昨日はありがとうございます」
アザゼルにベッドの上からは失礼だと思い、下りて頭を下げる。
この人に付いて来なかったら、私は森の中で野宿かあのミノタウロスに食われてたかもしれないんだから。
私がそうしてアザゼルさんは笑って言う。

「気にすんなって。俺も気紛れだったからな」
「それでもです。どんな仕打ちにされようが文句は言いません」
「……ん？」
「人体実験でも人体解剖でも受け入れ……」
「待て待て待て！どうなったらそうなるんだ!?」
私が決意表明してるときにアザゼルさんからストップがかかる。
なにかおかしかっただろうか？
「何かおかしかったでしょう？」
「いや、普通におかしいだろ！俺も部下も人体実験も人体解剖もしないからな!?」
「しないのですか？」
「するわけないだろ！」
「じゃあ、なんで私を拾ったのですか？私にできることはそれぐらいしか……痛っ」
唐突に頭に衝撃が走る。
これは拳骨……？
頭を抑えながらアザゼルさんを見ると、どこか怒っているように見えた。
すると、私を抱き締め、小さく呟く。

「お前はまだ子供なんだから、もっと自分を大切にしろ。俺たちはお前を捨てないし、死なせはしない。だから、俺たちを信用してくれ」
その言葉を聞いたとき、私は自然と涙が溢れた。
何故かは分からないが、涙は止まらなかった。

「さて、落ち着いたか？」
「ごめんなさい。取り乱しました」
アザゼルさんの説得のおかげでなんとか落ち着けた。
私はこんなことでもしなければ置いてもらえないんじゃ無いかと無意識的に思い、ああ発言したけど、アザゼルさんはそんな気は微塵もないらしい。
それで事態が落ち着いたのを確認してからアザゼルさんが口を開く。
「お前にはこれから勉強をしてもらう」
「勉強…？算数とか国語とか？」
「まあ、確かにそれもして貰うが、それよりも裏の世界について学んでもらう」
「裏の世界……？」
その言葉に疑問を持ち、オウム返しになってしまった。
だけどアザゼルさんは頷き、口を開く。

「まず、信じられないだろうが、俺は人間じゃない」
「人間……じゃない？」
私はその言葉が理解できなかった。
彼はどこからどう見ても人間にしか見えなく、昨日みた牛のようなものと同類とは思えなかったからだ。
そんな私の考えを読み取ったのか、彼は突如として背中から十二枚の黒い、鳥のような翼が現れた。
そういえば、昨日堕天使とかって言ってたような気がする。
「俺達は堕天使といってな、元々天使だったんだがとある理由で堕ちた存在だ。他にも天使や悪魔とかもいるぞ？」
「キリスト教……？」
堕天使に天使、悪魔と来たらそれしか当てはまらなかった。
いや、そもそも三大宗教しか知らなく、その中でもキリスト教の天使の存在は有名だった。
特に、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた『受胎告知』で出て来たガブリエルは有名だ。
私がそう呟くと、アザゼルさんは肯定した。

「まあ、そうだな。その聖典である聖書には俺の名前もあるんだぜ」
「え？じゃあガブリエルとかも知ってるんですか…？」
「おうよ。四大天使の一人で、天界の纏め役の１人だ。そして四大天使の唯一の紅一点だな。アイツ以外全員男だし」
あ、堕天使だから元仲間みたいかんじで知ってるのか。
なんて、思ってると次の言葉に耳を疑った。
「それに滅茶苦茶強いぞ。戦争の時に何度も殺し合ったが、決着は着かなかった」
「ほぇ？」
今なんて言ったの……？
「戦争してたんですか……？」
「そういや、言ってなかったな。大昔、俺ら堕天使と悪魔と天使は戦争をしていたんだよ。今思うと若気の至りだが……そのせいでどの陣営も数が減ってしまってな。今は休戦状態のようなものだ」
あれ…？
思ってたのと違う。
堕天使と悪魔って同じ陣営じゃないんだ。
私がそう疑問に思ってると、アザゼルが私に告げる。

「そんな感じで、お前には明日から知らないであろう、こちら側の世界について学んでもらうつもりだ。それと兼任して戦闘ができるように仕込んでやる」
「は、はい！ありがとうございます！」
「気にすんな。後、どちらも教えるのはコカビエルという幹部の1人だ。あ、そうだ」
「？」
アザゼルさんは何か思いついたのか、私に言う。
「幹部共にお前を紹介しようかと考えたが、その内会うだろうし、問題ないだろ。だが、1人だけお前に会わせたい奴がいるんだ」
「??私にーーー人外のーーー知り合いはいませんよ？」
「違う違う。どちらかと言えばこれから宿敵になり得るかもしれない奴だ」
「宿敵？」
宿敵って、ライバルみたいなものだよね？
知り合いがいない此処で恨みを買った覚えは全くないんだけど……。
「取り敢えず、今から行くぞ」
「は、はい！」
取り敢えず、私は深く考えずに付いていった。
私にはまだ理解できないと思ったから。

そうして付いていくこと十分。
アザゼルさんが一つの部屋の扉を開け、そこには広い空間が広がっていた。
学校の体育館より広いが、トレーニング用の器具やサンドバッグなどが至る所に置いてあった。
そこでは沢山の人がトレーニングをしていたが、一人だけ異彩を放つ者がいた。
それは銀髪の少年でかなりの美形だった。
その少年は上体起こしをしながらダンベルを上げ下げしていた。
恐らく私と同じくらいだろうに、凄いなぁ。
他の人も変なものを見るような目で見てるもん。
それには同意するけど、何があそこまで彼を駆り立てるのだろうか……。
アザゼルさんは彼を探していたのか、見つけるなり声を掛けた。
「おーい！ヴァーリ、お前に合わせたい奴がいんだ」
「ん？アザゼルか。会わせたいというのはそこの少女か？」
ヴァーリと呼ばれた少年は反応し、私を見ながらこちらへやって来た。
うん、近くで見てもイケメンだと思う。
そんなくだらない事を考えてると、ヴァーリの表情が突然どんどんと驚愕に変わっていき、アザゼルさんに叫ぶ。

「どういうことだ！アザゼル！」
「やっぱり気付いたか。まあ、これから仲間となるやつだ。今のうちに挨拶しとこうと思ってな」
『これは面白いことが起こったな』
アザゼルがヴァーリを宥めてると、ヴァーリの背中から別の声が聞こえた。
次の瞬間、ヴァーリの背中から機械のような翼が生えた。
何それ？
「なんだ、まだ目覚めてないのか。それで本当はどういうつもりだ」
「いや、お前らと出会ったら出て来る可能性があるだろ？そう考えたら、抑えられないだろ？」
『貴様、本当に総督なのか？』
などと話してる。
あの～、その翼について教えて欲しいんですけど……。
そう言おうとしたとき、体中に激痛が走る。
その痛みに耐えきれず、私は断末魔を上げる。
「う、うぅ、う……アアアあ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟!!!」
「おい、アザゼル!!」

「どういう事だ!?今までこんな事は無かったぞ！」
『アザゼル、ヴァーリ。落ち着け。恐らくこれは目覚める前兆だ。後1分もしない内に治まる』
「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝!!」
「とは言っても、精神が侵されるぞ！」
「大丈夫なのか？アルビオン」
『間違いなく大丈夫だ。……そろそろ奴が目覚めるぞ』
「ハァ……ハァ……ハァ…。アレ？生きてる……？」
よかった……生きてるみたいだ。
死にかけた……みたいだね…。
「大丈夫か!?」
「死なないとアルビオンが言っていただろう？なら、心配するな。……だが、何故ここで？」
『それは俺のせいだな。彼女の精神が未熟なのと、魔力は今のヴァーリより少し下ほど持ってるために俺が現れたことによって無理矢理覚醒させられたのだろう。少女よ、すまない』
『貴様が謝ることでは無いだろう』

そこに新たな声が響く。

声がした方に視線向けると……私の左腕に見覚えのない赤い鎧みたいなのが嵌められていた。

何ですかこれ。

そう疑問に思ってるとアザゼルさんが説明してくれる。

「そいつの名は赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）。数ある神器の中でも十三種しかない神滅具（ロンギヌス）の一つだ」

混迷・白龍皇

「えっと……お騒がせしました」
どうも兵藤一瀬です。
忘れていたけどここは多くの人がいるトレーニングルームなので、彼らは一部始終を見ていたのです。
なので、かなり騒いでしまったと思い、頭を下げた。
アザゼルさんも謝ってくれたけど、ヴァーリ君はどこか偉そうにしていた。
なんで？
後から聞いた話だけど、ヴァーリ君は既に強い堕天使よりも強いらしい。
アザゼルさんや他の幹部方達にも引けを取らないという。
凄いんだね。
ちなみに、あの後はアザゼルさんが原因だったらしいので、ヴァーリ君提案の元、アザゼルさんに一回だけ何でも言うことをきかせる権利を貰った。
う～ん、アザゼルさんのせいだとは思えないんだけど……ヴァーリ君から言いくるめられて、それで今回の件は治まりまることになりました。

それで、これからどうするのかというと……

「ヴァーリ君に付いていく？」

「おう。そして、少し自分がどういう存在か学んでこい」

「おい、アザゼル」

「問題ないだろ？どうせトレーニングか模擬戦か勉強しかやんないんだから。息抜きついでに色々と教えてやってくれ」

「はぁ……。仕方ないな。分かったよ」

今日だけヴァーリ君は私の教師代わりをやってくれるそうで、最初は不満気味だったけど、アザゼルさんの説得で承諾してくれた。

それから私たちは部屋を出て、アザゼルさんと分かれた後にヴァーリ君が話してくれました。

「まず、一つ聞くが……何も知らないんだな？」

「はい」

「なら、お前のことから知ってもらおうか」

「私？」

「そうだ。まず、神器（セイクリッド・ギア）について話そうーーーー」

ーーーーー簡単に纏めると、神器というのは聖書の神ヤハウェが創り出した人間のた

めだけの兵器のような物で、それぞれが人外に対抗できる手段を持っているが、まだ全容は把握仕切れていないらしい。

未だに新種が見つかることもあるって。

それで、その中でも比べものにならないほどの力を持ったのが、神滅具（ロンギヌス）と言われ、こちらはまだ十三種しか確認されていないらしい。

だけど、その力を極めれば文字通り、神さまを倒せるとのこと。

私が持っている赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）やーーーさっき教えて貰ったけど、ヴァーリ君の背中から生えてる機械みたいな翼ーーーヴァーリ君が持っている白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）も神滅具に分類されるんだって。

私のは１０秒毎に能力を倍加させるらしく、ヴァーリ君なは１０秒毎に相手の能力を半減させるらしい。

ここで思ったのが、まるで正反対だということ。

お互いが戦ったら平行線になるのではないかと考えたけど、正解みたい。

「その通りだ。昔から赤龍帝と白龍皇はその能力故に因果が働き、ほとんどの歴代の者達もお互いに争っては自滅していった」

「じゃあ……私たちも戦わないといけないの……？」

その答えを聞き、肯定してくれたヴァーリ君に私はそう聞く。

なら、ここで私たちが戦ってもおかしくはない…ということになる。
ヴァーリ君は常にトレーニングをしているのに対して、私は昨日ここに来たばかりで……最弱と言っても良いかもしれない。
もしそうなったら、何をどうしようと私は死ぬ。
しかし、ヴァーリ君はそんな私の不安を鼻で笑った。
「フン。安心しろ。ここに来たなら戦っても良いだろうが、殺しはしないさ。……そうすると、俺が殺される……」
最後の方になんて言ったか分からなかったけど、彼は私を殺すつもりは無いらしい。
考えてみれば、必ず殺す必要は無いんだ。
だけど、後から聞いた話では彼は戦闘狂という強い者と戦うのが好きなので、弱者である私と戦うことに興味が無かったらしいのと、当時のヴァーリ君はアザゼルに私を殺さないように釘を刺されてたらしい。
それより、それからは色々教えられた。
白龍皇の光翼は半減した能力を吸収できたり、私の赤龍帝の籠手は倍加した能力を他人や物に譲渡できたり、堕天使の構成や他にはどんな神話体系があるかなど。
特に、彼が活き活きしていたのは、他の組織や神話体系の強い人達について語る時だった。

北欧神話の……トール、だったかな…。
その人は世界でもトップ１０に入るほど強く、雷を自在に操れるらしい。
他にもいくつかあり、せいてん……なんとかの孫悟空とか、日本神話のスサノオやインド神話のシヴァ、ギリシャ神話のゼウスだったり、色んな強い人を教えて貰った。
何となく察してたけど……戦うのが好きなんだなーと思う。
私は喧嘩はしたことあるけど、あまり楽しいと思ったことは無い。
どちらかと言えば、私は誰かを護るために必死になっていただけ…。
数人がかりで一人を虐めるのが許せなく、それを追い払う感じでやっていて、あまり記憶はない。
だけど、ヴァーリ君はそれを楽しいと思えるのは、少し羨ましいと思う。
私は女の子で、男の子達より力が弱いからその場にあるものを使ってでしか渡り合えなかった。
さっき、アザゼルさんから戦争をしたって聞いたけど……もしかしたらまた戦争が起こって、彼もいつか戦争に出るのかな…。
私は何故かそれが物凄く不安だった……。
そうやって……ヴァーリ君ーーーー時々アルビオン又はドライグーーーーから色々と教えて貰い、１日が終わろうとしてヴァーリ君とは夕飯の時間になって指定され

た部屋に行こうとした時、彼から一つ質問をされた。
「……お前はどうしたい？」
「えっと……何が……？」
「お前に宿るその力は己に破滅を齎す。このまま生きるというのなら、お前の人生はきっと波乱に満ちるだろう。それでも……お前は生きたいか？」
私はこの時、あまりこの言葉の意味を理解していなかった。
けれど、私が言ったこの言葉は間違ってなかったと未来永劫思うだろう。
「私は生きたい。大切な人達を守るために。お母さんとお父さんには捨てられたけど……それでも大切だと思ってるし、アザゼルさんやヴァーリ君も大切な人だと思ってるよ。だから私は、そんな人達を守りたい」
『ふっ。今代の相棒は随分と優しいもんだ』
ドライグが少し呆れたように言うけど、変なことは言っていない……と思う、たぶん。
その言葉に、ヴァーリ君はちょっと驚いた顔をしたけど、またぶっきら棒な顔に戻って、「そうか……」と呟いてどこかに行ってしまった。
あれ？
ご飯は食べないの……？

◇◇◇

ヴァーリ……いや、ヴァーリ・ルシファーは神の子を見張る者（グリゴリ）の本部の廊下を歩いていた。

すれ違う堕天使は彼に嫉妬や恐怖といった様々な感情を見せ、足早に去って行く。

しかし、彼はそんな事はどうでもよかった。

慣れたというのも一つの原因だろうが、今はそれよりも頭の中を支配するものがあった。

それは先程まで一緒にいた少女の言葉。

『私は生きたい。大切な人達を守るために。お母さんとお父さんには捨てられたけど……それでも大切だと思ってるし、アザゼルさんやヴァーリ君も大切な人だと思ってるよ。だから私は、そんな人達を守りたい』

『大切』…という言葉は彼にとって理解できない物だった。

彼は前魔王ルシファーの曾孫に当たる存在だが、人間と悪魔のハーフだ。

そんな彼はアザゼルに拾って貰うまで、ずっと家族から虐待を受けていた。

何故、自分がこんな目に遭わなければいけないのか分からなかった、。

だが、ある日逃亡を決意し、運良くアザゼルに拾われたのだ。
そのせいか、彼はいつも無意識的に誰に対しても不信感を持っていた。
アザゼルに拾われて数年経ってやっとアザゼルに不信感を持たなくて済むようになったのだ。
だが、それでもヴァーリにとって『大切』とは成り得なかった。
アルビオンですら仲間とは思ってるが『大切』と思えるほどでは無かった。
だからこそ謎だった。
親に捨てられたという、共通の出自を持った彼女が何故家族を憎まないのか。
どうして彼女の言葉がここまで印象に残ったのか。
本来の家族に一度も『大切』にしてもらえなかったヴァーリには分からないし、一度も家族がいなかった相棒であるアルビオンも分からない。
恐らく、ヴァーリと一瀬の違いはそこなのだろう。
一瀬は親に『大切』に育てられてる時に絶望がやって来たのに対し、ヴァーリは最初から絶望を味わっていた。
この違いはあまりにも大きい。
ヴァーリと一瀬が同じ考えになることはないだろう。
だが、思考が違うからといって答えが違うとは限らない。

世の中には答えに辿り着くまでには幾つもの道がある。
彼がそれを理解するのは、そう遠くない。

決断・堕天使の総督

こんばんわ、兵藤一瀬です。
夕飯はアザゼルさんと食べました。
アザゼルさんはお偉いさんなので凄い食事なのかなと思ったら、何とカップ麺を食べてました。
ちなみに私も食べました。
私が食べたのは緑の○ぬきで、アザゼルさんが赤いきつ○でした。
あの天ぷらのサクッとした感じも好きだし、段々とふにゃふにゃになってくるのも好きだ。
カップ麺は初めて食べたけど、意外とおいしく、今度色々買おうかなと思った。
食べ終わったらアザゼルさんから風呂入ったら寝ろと言われ、言われたとおりにした。
ただ、寝ろと言われたのは個室でアザゼルさんの部屋と比べたら質素だけど、私にはそれが似合ってるような気がして、用意してくれたアザゼルさんに感謝して、そのまま寝た。

そう言えば、明日からコカビエルさんが……教えて……くれる…んだっけ……。

◇◇◇

初めましてだな。
俺の名はアザゼル。
神の子を見張る者（グリゴリ）の総督をやってる者だ。
だが、今の俺は正直悩んでいた。
それは最近拾った少女が原因だ。
名は兵藤一瀬。
その少女は俺が逃がしたはぐれ悪魔に殺され掛かってたから助けたはいいが、よく見ると神器持ちだった。
だが、はぐれ悪魔に無抵抗だったことから目覚めてはいないだろうと踏んで、なんでこんな夜中に人気の無い山にいたのか話を聞くと……親に捨てられたという。
それだけでブチ切れかけたが、本人が怒ってないのに俺が怒る道理は無いと思い更に聞くと……面倒なことになっていた。
少女はその日まで普通の生活をしていたが、突如として現れた自分と似た名前を持つ

男が、己の名前を言った途端に両親は自分忌み子のように扱い、勘当されたのだという。
それを聞いたとき、意味が分からなかった。
突如現れた自分と似た存在？
名前を告げた途端に自分に関する記憶が改変され、そいつが元からの家族だと錯覚させた？
恐らくだが、今なら俺でもそいつは消せるだろうし、少女を家に置くこともできるだろう。
だが、その後はどうなる？
下手をすれば、そいつが消えたことにより危険なことが起こる可能性もゼロじゃ無い。
なら、しばらくの間は部下に監視させるかとそう考えた。
そして、少女を戻すのも危険と考え、保護すると決めた。
だが、あちらからしたらこちらは正体不明の男だ。
家を追い出されたすぐだ、俺は自分を追い出した奴の仲間と思われても仕方ないと思う。
まあ、俺が誘ったら案の定迷ったが、最終的には来ることを選んでくれたからよかったがな。

決めてくれた後にここに連れてきて軽く自己紹介したら、すぐに寝ちまった。
そりゃそうだ。
ようやく１０歳になったばかりの女の子があんな夜遅くまで起きてるもんじゃないしな。
俺もその後に寝たが、疲れ切ったあいつとは違って俺はそんなに疲れてもいなかったから大分早くに起きれた。
その後に起こさないようにこっそり何の神器を持ってるか調べたら……結果を観て、俺はその場に誰もいないことを良いことに、おもくそ頭を抱えた。
少女が持っていたのは……赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）、かの二天龍が封じられた神滅具（ロンギヌス）の片割れだ。
それだけならまだ良い……いや、全然良くないが、問題があった。
俺たちの組織、神の子を見張る者は既に一人神滅具所有者を保護していた。
そいつの名はヴァーリ・ルシファー。
前魔王の曾孫に当たる存在だが、そいつは赤龍帝の籠手とは対を為す、白龍皇（ディバイド・ディバイディング）の光翼の所持者だった。
つまり、俺たちは今代の二天龍を両方同じ陣営に入れてしまったのだ。
これが公になれば、悪魔や天使どころか他の神話勢力からも色々言われかねない。

だから俺は決めたんだ。
こいつは時が来るまで存在を隠すとな。
時というのは、あいつから両親を奪った存在の正体が分かったときだ。
こいつの存在はなるべく隠さないといけない。
俺は調べ終わった後、副総督であるシェムハザに相談しに行った。
「よう、シェムハザ。ちょっと相談したいことがあるんだが、良いか？」
「珍しいですね。貴方から相談なんて……あれ？なんか物凄く嫌な予感がしてきました」
「おう、間違ってないぞ」
シェムハザが開口真っ先に失礼なことを言ったが、あながち間違ってないことに若干驚き、笑いながらそれを肯定する。
シェムハザはそれに露骨に嫌な顔をしたが、一緒に悩もうや。
そして、俺が説明していく度にシェムハザの顔から生気が抜けていくのが分かった。
顔は文字通り真っ青だ。
いつもなら笑っているが、自分が原因なのと同じ気持ちの同情から一切笑えない。
シェムハザは俺の胸元を掴み、思いっ切り揺さぶってきた。
「なんということをしてくれるんですか!!このトラブルメーカーは!!!あーーーーーー

本当やってくれましたね!!」
「本当悪かった。マジで悪いと思ってる……」
「はぁ～～～～～。もうやってしまったことは仕方ないです。……他に知ってるのは？」
「俺だけだ」
あの時俺の部屋周辺には誰もいなかったのは間違いない。
シェムハザは気を取り直して、聞いてくる。
「なら、構いませんが……予定は？」
それは確かに色々考えた。
だが、
「ないな。アイツには悪いが、時が来るまでここから出さないつもりだ」
裏の世界の奴らの情報収集力はバカにならないほど早い。
どこで目を光らせてるかマジで分からないレベルだ。
本来なら自分たちだけしか知らないはずのことを知ってるときもあるからな。
「そうですか。では、メフィストフェレス様にも伝えないのですか？」
メフィストか。
魔術協会である『灰色の魔術師（グラウ・ツァオベラー）』のトップで、大戦時から生きてる最古参の悪魔の一

人だ。
そして、俺とも何度も交流がある友人だ。
あいつも神滅具所有者を保護してるし、一瀬のことも隠してくれるだろう。
しかし、
「……それも考えたが、万が一に勘付かれたら厄介だ。メフィストじゃない他の誰かにな」
「分かりました。では、本部にいる者でも限られてくる訳ですか」
「ああ。だが、一人だけ会わせたい奴がいる」
「……まさか…」
俺の言葉にシェムハザはまた顔を青くしてくる。
まあ、そりゃ誰だって察するよな。
「まさか、ヴァーリに会わせるつもりですか！」
「おう」
「彼女はまだ目覚めてないのでしょう？危険すぎます」
まあ、そりゃそう思うよな。
「大丈夫だ。あいつら同じ年齢だし、上手くすりゃ気が合うかもしれないしな。それに万が一があったとしても」

「確かに貴方が適任ですが……」
「……そろそろ起きそうだな。じゃ、とりあえず行ってくる。話はその後でも良いか？」
「構いません。それまでは任せます」
そうして俺は一瀬の部屋へ行った。

□■□■□

そして、ヴァーリに一瀬を任せて、シェムハザの所に戻って事情を説明すると拳骨を喰らった。
「いって!?」
「今回は貴方が代償をするのと箝口令を敷いたと言うことなので、これで許しますが……年端も行かない女の子になんという苦痛をを与えているのですか……全く」
「それは俺も思うところがある。今回のは全くの予想外だった……。だが、これで少し分かったことがある」
「分かったこと……？」
シェムハザは疑問の声を揚げる。

恐らくアルビオンの発言で納得したのだろうが、研究している俺からしたら違和感があった。

「お前は一瀬がどうしてここに来たのか知ってるよな？」

「ええ、聞いた限りですが…」

「なら、アイツは全てを奪われたと言っていた。親も友人も居場所も、そして幸せな記憶も」

「１０になった少女が経験するものじゃありませんね…」

「だから思ったんだよ。なんで奪った奴はドライグを奪わなかったのか、ってな」

「!?」

確か、一誠つったか？

一誠は一瀬から全てを奪った。

なら、一瀬が赤龍帝の籠手を持ってたという事を知っててもおかしくは無い。

なら、何で奪わなかったんだ？

仮説ならいくつかあるが、有力なのは三つ。

「三つですか？」

「ああ。一つは、奪えなかった。神器は所有者の魂と密接な関係にあり、神器を抜かれた所有者は死ぬ。だが、神滅具はそれ以上に複雑な関係をしている。そもそも俺たちで

も神器を安全に取り出す研究は実を結んでいないからな」
神器を安全に抜き出す技術は後少しと言うところまで来ているが、あと一歩何かが足りないという状態だ。
恐らく奪った奴は神滅具を抜くことを諦めたんだと思う。
「二つ目は既に別の神滅具級の神器を持っていた。神器自体二つ宿ることはないが、奪って自分に宿すことはできる。だが、その代償として神器を二つ同時に使うと魔力だけじゃ補えなくなり、生命力を大量に消費する羽目になる。それが神滅具級となれば俺たちでも無視できない程の量になる」
前にそう言う奴がいたんだ。
人外を恨んでより強力な物を求めて、殺して奪った神器をその身に埋め込むことに成功したは良いが、いざ実戦で二つ同時に使おうとした瞬間にそいつは一気に老けて戦えない状態になってしまった。
まだ生きてはいたが、長くは生きられずすぐに死んでしまった。
一誠はそれが分かっていた。
「三つ目……これは一番有り得ないと思いたいが、もしかしたらということもある」
「それは、世界に影響が…？」
「影響なんてもんじゃない。前代未聞の大波乱になるぞ。その三つ目だが……

一誠とやらも赤龍帝ということだ」
「!!!」
これは本当に有り得ないと思ったのだが、心の何処かで何故か否定してきたのだ。
今の三つの中で一番可能性が低いのに否定しきれないのが不思議で仕方ない。
これは本当にハズレて欲しい思う。
「そんな事があったら、世界は大混乱に……!」
「だから言っただろ。前代未聞の大波乱になると。今、一瀬から教えて貰った住所を頼りに一誠とやらを監視させている。情報はまだ来ていないが……この結果で俺たちの動き方が変わるぞ…」
三大勢力どころか各神話勢力も荒れる事だろう。
なんせ……今代の赤龍帝が二人いることになるんだからな。
神器なら笑ってよくあることだと言えるが、神滅具なら誰だって真顔になる。
まあ、有り得ない話だがな。
「なるほど、ではその三つを考えて行動した方が良いでしょうね。あー……胃が痛いです」
「今回ばかりは同感だ……。あ、そうだ。一瀬が一定以上強くなったら堕ちてきた者たちの纏め役にしようと思うんだが、どうだ？」

堕ちてきた者たち、というのは神器使いの少年少女達が通う教育施設だ。
まだ未熟なために誰か殺されないようにするために建てたということもあって外出許可は厳しくしてるが、一定以上の実力が認められればある程度は緩和するようにしてある。
将来的にはあそこの教師になって貰おうと考えていたりする。
「彼女の性格なら問題ないどころか、喜んで受けるでしょう。彼女は優しいですからね」
「だろ？それに、かの二天龍が神器に教えてくれるんだ。あいつらも大喜びだろう。……だが、あいつには悲しい思いをさせることになる」
「それが、コカビエルとの個人レッスンですか……。しかし、大丈夫でしょうか？彼は根っからの戦闘狂ですが……」
「あれ？お前知らなかったのか？あいつが前に人間界に行った際に塾の講師として働くことになったんだが、その時に教える喜びを知ってから偶に堕ちてきた者たちに教えに来てるぞ」
「……それは何よりです」
シェムハザは驚きと呆れの感情でそう言ったが、気付かなかったのか？
あ、俺のせいか。

そんな感じに、シェムハザと俺は今後について一瀬との夕食の時間まで話し合った。

飯はカップ麺で良いか。

日本製の旨いし、あいつも気に入るだろう。

指導・堕天使の幹部

「ハァ……ハァ……ハァ……後……どのくらい……？」

『後二キロと言った所だな。しかし、途中途中休みがあるとは言え、よく十キロも走らせるな』

兵藤一瀬は今、神の子を見張る者の専用修練場にいた。

一瀬は今日から始まったコカビエルとの個人レッスンで、その一つ目である十キロランニングをさせられていた。

まだ子供ということで途中休んでは良いが、十秒以上立ち止まってはいけないというルールでそれを今行っている。

しかし、それは今までスポーツをやってた者ならまだしも、遊びで走り回ったことしかない少女にはかなりキツいものだ。

その証拠に一瀬は今、吐き気が酷かった。

『それはそうだろう。人外ならまだしも、人間である上に子供のお前にはこの距離はキツいだろう。全く、コカビエル奴はスパルタだな』

「良い…ハァ……んだよ…。強く……はぁ……なれるなら……はぁ……このぐらい、耐えてみせるよ…ハァ…ハァ」

『……その心意気は認めるが、お前はまだ子供なんだ。あまり気負いすぎるなよ』

「わかっ……はぁ……てる…ハァ」

だが、一瀬はこのトレーニングを平然と受け入れていた。

ドライグはそれを少し異常だと感じていた。

この少女はほんの少し前に裏の世界に入ってきたばかりだ。

異形の存在である堕天使や神滅具（ロンギヌス）を受け入れるのは早いとは思わないが、何でもかんでも受け入れすぎだと思っていた。

そんな少女にコカビエルが教えた今日のトレーニング一覧は、何も鍛えていない子供に少しキツいものだ。

ランニング十キロ、腕立て伏せ百回、腹筋百回、スクワット百回、体幹トレーニング1時間など、他にも色々とあり、この中で大きな休憩は昼食しかなく、夕食の時間までに終わる予定ということ。

ドライグも宿主が強くなれることは嬉しいが、子供のうちからこれは厳しいのではないか?と疑問に思ったが、どうやらコカビエルは限界までやらせて一瀬の基礎能力を調べるつもりのようだ。

ドライグはそれなりの数の宿主を経験してきたが、ドライグが宿主を鍛えることもあったが、それは夢の中で模擬戦をするか、自己鍛錬してる最中にアドバイスをする程度だったので、こういう基礎トレーニングに関してはコカビエルよりも上手くできず、あまり文句は言えなかった。

だが、これは限界を知るためのトレーニングだ。

限界だと思ったら途中でリタイアしても良いのだ。

が、一瀬にその選択肢はなく、ゴールするという目標しか見えてなかった。

ドライグはここまで純粋だともはや病気だと思う反面、これは仕方ないと考えてることもあった。

その理由は彼女がここにいる理由だ。

彼女は親を謎の存在から奪われたのだ。

そんな彼女は強くなって家族を取り戻すためにここにいる。

恐らく、今も家族を思ってこのトレーニングに励んでいるのだろう。

事実、ドライグの予想は当たっていた。

彼女の心は常に家族を思っていた。

家族を取り戻して、またいつか同じ食卓で笑い合える日が来ることが彼女の今の夢であり目標でもあったからだ。

彼女がまず、このトレーニングを始める前に教わったのが、人間である自分の身体能力を何倍にしようとも人外に勝てないと言うことだ。

なら、どうするか？

答えは簡単、体を鍛えれば良い。

２の２倍と３の２倍で差があるように、１でも増えて倍にしていった時の力は大きい。

だから彼女はやる気が出てトレーニングを受け入れてるのだ。

これがテストだと教えられても彼女はゴールに辿り着くまで、止める気は全くなかった。

彼女がゴールするのに掛かった時間は７９分３６秒。

平均より約十分程遅いが、彼女と同年代の女子からしたら速いほうである。

平均は約７０分で、これを出すのに使われたほとんどの記録は大人の女性であるため、見る人が見れば彼女をスカウトするだろう。

そもそも走り切ることが凄いことなのだから。

同年代で走りきるのは男子の中でも優秀な人だけなため、これだけ言えば彼女の凄さが分かるはずだ。

だが、これは神器に目覚めた影響と言っても良いだろう。
神器使いは基本的に人外と戦うためにポテンシャルが少し上がるようになってるのだ。
それでも人外達には及ばないものの、鍛えれば技術や魔力で人外と渡り合えるために、常に己を鍛える必要があるのだ。
それを理解してるであろう、今体力ギリギリのせいで倒れてる少女を観察する男。
名をコカビエル。
アザゼルやバラキエルが彼女を鍛え上げられないため、その代理人として彼が一瀬を育てることになったのだ。
何故、原作でも主人公を育てていたアザゼルが彼女を育てないのか。
読者方は不思議であるはず。
その理由はアザゼルは一瀬から全てを奪った存在を詳しく調べるつもりだからだ。
昨日放ったばかりの調査隊からはまだ連絡はないものの、アザゼルはかなり危険視していた。
本能で否定しきれない『一誠が二人目の赤龍帝である可能性』があるため、いつでも気を引き締めないといけない。
仮に、もしそうだった場合、裏に誰かいるのは間違いないだろう。

そして、その誰かが強大な何かということも。
何せ、赤龍帝の籠手（ブースト・ギア）を創り出し、どこの馬の骨とも知らぬやつに神滅具（ロンギヌス）与えるような存在だ。
寧ろ警戒しない方がおかしい。
もし、一誠と言う奴が、裏にいる人物に守られていたら迂闊に手を出せない。
そうじゃ無かったとしても死んだときに厄介な何かが埋め込まれていたら、かなり危険だ。
例え、一誠が赤龍帝じゃなかったとしても、他の神話勢力からの刺客かもしれないので、今、一誠を調べると同時に他の神話勢力へ偵察へ行ってる部隊もいる。
その情報を纏めるために、一瀬とは食事の時やちょっとした休憩時間でしか会えないのだ。
コカビエルはその事情も含めて全てを理解した上で一瀬の育成を承った。
だが、コカビエルも少し思うところがあった。
（神器に目覚めた影響で身体能力は少し上がってるようだが、完走できたのはそれが原因ではないな。……家族への思いか。復讐ではなく、夢としてそれを原動力として無理矢理に体を動かしているようだ。ひとまず、トレーニングは一通りやらせて、後はアザゼルと要相談だな）

コカビエルが危惧したのは自己犠牲の精神だ。
アザゼルから聞いた限りではかなり優しい心の持ち主で家族思いなのは聞いていたが、おそらくは一誠の介入によって根底が変わってしまったのだろう。
元々は誰かを助けるという優しい心は、自分がどうなってでも家族を助けようという復讐に近いが負の感情が一切ないという歪な心になっているのだろう。
そんな一瀬は、今も必死に立ち上がろうとしているが、ドライグがゆっくり休めと言っても一切やめる気配はない。
コカビエルは見かねて、彼女に声を掛ける。
「一瀬、休める時には休め、でないと体を壊しかねんぞ」
「それ……でも…立ち上……がらなきゃ。強く、なれたせんから」
『相棒、その気持ちは分かるが、今はゆっくりしろ。何もお前の家族が今すぐに死ぬという訳じゃ無いだろ？時間はまだたっぷりあるから、安心しろ』
「……はい」
少女は渋々承諾した感じでゆっくりと休み始める。
コカビエルは溜息を吐いたが、それは現状にではなく、ヴァーリとはまた違う厄介な奴が来たからだと考えたからだ。
ヴァーリは戦闘狂にして家族を嫌っており、一瀬は戦闘を好まず家族を愛している。

何もかもが正反対で、しかもお互いが対を為す二天龍と来た。
アザゼルは気が合うかもしれないと言っていたが、本当に合うのかと心配になってきた。
まさか、昔あれだけ戦争をしたがっていた自分が、子育てにこうも悩む日が来るとは思わなかった。
塾に通う人間や堕ちてきた者たちに通う神器所有者ですら、ここまでじゃない。
サタナエルの者達は話が別だが、これからの一瀬の成長にコカビエルは頭を悩ますのであった。

休息・堕天使の総督と赤龍帝後に白龍皇と幹部

「それで、試しに一週間行ったがどうだ？」

「そうですね。体の方は確かにかなりキツいですが、着実に強くなっているのが感じます。頭の方は問題ないです」

『おい、アザゼル。相棒の吸収力はスポンジどころか高性能タオル並だぞ。歴代トップレベルで、強くなるスピードが速いぞ』

どうも、兵藤一瀬です。

コカビエルさんの指導を受けてから一週間が経って、アザゼルさんと会える時間は減ってしまったけど、将来的にはもっと会えなくなるかもしれないので、今のうちに慣れておいた方が良いかもしれないと思っています。

コカビエルさんと初めて会ったときは正直に言って、ビビりました。

ごめんなさい。

けど、優しい人だって分かりました。

トレーニングはかなりキツいけど、全て終わった後にアドバイスをしながら動けなくなった私を支えて風呂場へと連れてってくれる。

着替えも用意されてて、本当にありがとうございます。
この一週間は、トレーニングと勉強を一日毎に変えてローテーションで回してました。
今日はトレーニングの日だと思ったのですが、アザゼル先生から今日までの感想を聞くためなのと、週に一日は休みを取るために、今日は全てお休みです。
それで、アザゼルさんから色々聞かれてますが、偶にドライグさんがツッコミを入れてきます。
「成長するのは嬉しいが、やりすぎるなよ?」
「……そのつもりではあります」
『嘘吐け。一昨日コカビエルからやりすぎだと怒られただろうが。何のためにコカビエルがトレーニングの内容を変えたと思っている』
「うっ……」
「まあ、コカビエルから報告は聞いてるからな。どうせお前は休日だと言っても鍛錬か自学しかしないだろ?というか、既に夕食終わった後に自室でそうしてるの知ってるからな」
「うぅ……」
だって、する事がそれしか無いんだもん……。

お家にいたときも読書ぐらいしかなくてお父さんの小説を借りてたから、シェムハザさんやアザゼルさんに頼んで色々な本を見て勉強をするか、トレーニングで学んだ鍛錬をするしか私には似合ってるような気がするから…。

「お前、今時の女子小学生が読書か鍛錬しか趣味がないってどうなのよ？」

「ダメ……なんですか？」

「いや、ダメどころか寧ろ良いことだが、人間関係に問題がある奴の生活だな。だからよ、俺が休日の過ごし方を教えてやるよ」

「……大丈夫なんですか？コカビエルさんから最近忙しいって聞いたんですけど……」

コカビエルさんが、アザゼルさんが稀に見るほど働いてるって聞いたから、総督というのはやっぱり組織のトップだから忙しいんだなと思った矢先に、大丈夫なのでしょうか？

そう心配してると、アザゼルさんがニカッと笑って頭を撫でてくる。

「ガキが大人の事情の心配をすんなって。俺は大丈夫だからよ。だが、敢えて言うなら、少し落ち着いてきてな。だからこうして、お前と会えるような余裕があるんだよ」

「そう……なんですか」

私は少し嬉しかった。

今となっては第二の父のように感じてるアザゼルさんと過ごせることが私には嬉しいから。

ドライグさんも賛同してくれる。

『感謝するぞ、アザゼル。こいつ自身も趣味が何なのか分からなくて困ってた所だったのだ。今回は丁度良い機会だから、こいつ教えてやってくれ。……変なのは教えてくれるなよ？』

「分かってるさ。つか、一瀬。伝説の赤龍帝に趣味が無いことを心配されるとか……俺も驚いたぞ」

「うぅ……親からも言われました…。お前は人助け以外にやりたいことはないのかって……」

「こいつ思ったより重症だったわ。ほら、早速行くぞ」

「は、はい」

アザゼルさんが半分ぐらい呆れてたけど、そこまでですか？

私、思ったよりもやばいんですか？

そ、そんな目で見ないでください！

ドライグさんもそんな憐れみのオーラを出さないで下さい！

◇◇◇

「これがかの任○堂が創ったＷｉ○だ。」
「あー、ＣＭで有名なやつですね」
先生が自室で紹介してくれたのは有名企業が創ったとあるゲーム機だった。
クラスメートが買ったことを他の人に自慢していたのを覚えてる。
なんでもクオリティ（？）と映像解像度が上がってオンラインでもできるようになったとかって燥いでいたような気がする。
ゲームは全然しないし、お父さんもお母さんもゲームに興味を持ってるようじゃ無かったから、触れ合う機会が無かったので生で見るのはこれが初めてかも知れない。
「これで何をするんですか？」
「これだ」
そう言ってアザゼルさんが見せたのは２つのパッケージの描かれたケースだった。
１つは英語でタイトルが描かれていて、草原の中に刺さった一振りの赤い剣らしきものと奥の方に灰色っぽい巨大な何かが描かれたものと、タイトルが『大乱闘○マッシュブラザーズＸ』と書かれた複数人のキャラが描かれたモノだった。
「まだ英語を習っていないお前には分からないだろうから教えるが、これは『ゼノ○レ

イド』つってな。一人の時にやると良い。んで、こっちが『大乱闘スマッシュブラザーズ』という最大四人までできるから、一人じゃ無いときでもできるし、Ｗｉ―Ｆｉも繋げてるからオンラインでもできるからな。さて、じゃあ試しにやってみるか」

アザゼルさんにコントローラーを渡され、先生から言われたとおりにやってみることにした。

ここで気付くことは無かったけど、よくよく考えたらこれ女子に勧めるジャンルのゲームじゃ無いことに気付いたけど、ツッコむのは止めようと思った。

～1時間後～

「あー！私のカービィが!?」

『これで12回目か。3分間で飛ばされすぎだろう』

「だから言っただろ。バリアやカウンターを駆使しろって。ほら、カウンターはこうやってーーーー」

～2時間後～

「……ここっ……ふっ……そや……！」

「甘い、大天空!!」

『なるほど、道連れの如く場外へと自分ごと落として落ちた時のシステムの判定で勝ちを持っていくのか。エグいな』

～3時間後～
「これが……カービィの全力です！」
「なにぃ!?俺のアイクが！」
「すまんな、勝ちは貰った」
『相手が動けなくなったときにカービィの石に変化でアイクをふき飛ばし、カービィが石から解除された瞬間にサムスのチャージショットで吹き飛ばすか。…ヴァーリはとんだ策士だな』
『なぁ、何故我らはゲームをしているのだ?さっきまでコカビエルと模擬戦をしていたはずなのだが……。というか赤いの、貴様順応しすぎではないか!?』
～5時間後～
「くっ……！」
「ありえねぇ……」
「そんな…！俺のサムスが……！」
「ふん、所詮貴様らなど先の時代の敗北者じゃけぇ。実に空虚な試合じゃったのぉ」
『ここに来てコカビエルのメタナイト無双になるとは……。流石は最強の称号を保つ者か…』
『おい、キャラが変わってるぞコカビエル！赤いの！貴様もツッコまんか！俺だけ

じゃ回んないぞ！というか何故、コカビエルがメタナイトを使ってるんだ!?まずゲームをするような奴だったか!?』

「ちくわ大明神」

『誰だ今の!?』

そうして、時間は過ぎていき、夕食の時間になり、アザゼルさんから感想を聞かれた？

「ゲームはどうだった?楽しかったか?」

「楽しかったです。また皆でやりたいです」

「だろ?」

「悪くは無かったな」

「人間正しくなきゃ生きる価値なし!!お前達に勝てる価値なし!!」

『俺たちを助けてくれた人を馬鹿にすんじゃねぇ!!取り消せよ……!!今の言葉……!!!』

『コカビエルもドライグもどうした!?さっきから何の茶番を見せられてるのだ！後何故か分からぬがセリフが微妙に違う気がするぞ』

アルビオンさんのツッコミが終わりません……。

ドライグさんとコカビエルさんがとても仲が良いからでしょうか？
仲良しならこれに越したことはないです。
その後、食堂で皆とご飯を食べさせて貰い、とても楽しかったです。
もう一回だけでも、こんな日が来るといいな……。
その日の夜、私は『〇ノブレイド』をいつもの寝る時間までやった。
巨神脚まで行って、七一式機神兵と触手にやられてしまいました。
触手は……勘弁して欲しいです……。

1年後、邂逅・黄金の獅子王（？）

〜1年後〜

どうも、兵藤一瀬です。

お久し振りですね。

ちょっとメタいですけど、読者の方々からしたら一日振りなんですけど、私からしたらかなり長い間経ってるので、一応と思いましての挨拶です。

この1年間の結果だけを言いますと、コカビエルさんやアザゼルさんのおかげで何とか戦えるようになり、コカビエルさんから一本だけ取れるようになりました。

……その後にボコボコにされるんですけど……。

赤龍帝の籠手（ブースト・テッド・ギア）をある程度扱えるようになり、ドライグさんからも誉められました。

しかし、次のステージである禁手（バランス・ブレイク）には届く気配がありません。

神滅具（ロンギヌス）である赤龍帝の籠手の禁手は神器（セイクリッド・ギア）よりも強力で、世界でも上から数えたほうが速いほどの強さになれるらしいです。

実際に歴代の赤龍帝の籠手所持者の一人は、たった一人で悪魔陣営に喧嘩を売って並々ならぬ被害を与えたと言うのです。

終始捕まること無く、最後にはわざと暴走させて自滅をしたって聞きましたが、アザゼルさんとも知り合いだったらしく、「アイツとはまた酒が呑みてぇな」と呟いていました。

きっと、優しい人なのだと思います。

私も、禁手に至って皆を守れるようになりたいです。

ヴァーリ君もまだ至ってないんだけど、「もう少しで何か掴めそう」だと言ってるのでそんなに時間は掛からないと思っています。

さて、そんな私ですが、今私は人間界にいます。

ここ一年間はずっと冥界の中でも神の子を見張る者（グリゴリ）の中でしか生活できなかったので、コカビエルさんから一本取ったご褒美らしいです。

場所はアメリカのワシントンで、首都らしいんですが他の州と比べて人はいないそうなので丁度良いという理由で来ました。

元々いた私の国、日本は〝奴〟がいるのと日本神話の管轄なので迂闊に足を運べないとのことなので、私が行けるのは当分先になりそうです。

ちなみに、私は英語が喋れないのですが、アザゼルさんの開発した自動翻訳機能のあるチョーカーで、相手の言葉が日本語で聞こえ、私の言う言葉が英語に聞こえるようになっています。

これ売れば間違いなく億万長者を狙えますが、魔力を用いてるとのことで人間界には出せないらしい。

まあ、そんなこんなで、今はホワイトハウスが見える通りをアザゼルさんと通ったとき、変な感じを覚えた。

不気味というか、違和感というか、何とも言えないような不思議な感じだ。

それをアザゼルさんに伝えると……

「それは直感か?」

と聞かれたので、気配の感じ方が未だに分からないので、頷きます。

すると、アザゼルさんが何か考え込み、更に聞いてきます。

「どこからか分かるか?」

そう聞かれたので、辺りを見回して直感が強く感じる方を指差すと、行くぞと言われ、横抱きに抱えられながら私が指差した方向へ連れ去られました。

途中から人気の無いところで認識阻害の魔法で姿を見えなくしてから空から飛んで行くと、段々と人気が無くなっていき、段々と森が広がっていった。

だけど、行くにつれて私の直感も強くなっているのが分かります。

やがて、アザゼルさんが何かに気付き、飛行を止めて地上に降りていきました。

そこは深い森の中で、人がいなそうな場所なんだけど、私の直感が一際強く反応して

いました。
そして、見えたのは一軒家と、先生が「しまった!?」と言ったときにはもう遅く、そこにあったのは元は人の形をしていたであろう肉塊とそこから漏れ出た血の池……でした。
それを見た瞬間、猛烈に吐き気が私に襲い掛かってきます。
アザゼルさんはすぐに地上に降りて、その光景が見えないような場所に私を降ろしてくれました。
私は耐えきれなくなって、草叢の向こう側で……。
事が治まると先生が私の頭を撫でて、何かしてくれたのか気分がかなり軽くなったので、お礼を言います。
「あの、ありがとう……ございます。……一体何が……?」
「……これは、神器の波動か……! 読めた。恐らくこいつらは神器所持者を眷属にしようとしたかはぐれ悪魔かは知らないが悪魔なのは確実だ。だが、交渉が失敗して強行手段に出たが、返り討ち……違うな。人間のもあることから、家族を殺された衝撃で暴走したのなら、納得できる。一瀬、どっちか分かるか」
「うっ……。あ、はい。たぶんあっちです」
「よし分かった。目を閉じてろよ」

言われたとおりに目を閉じると、浮遊感を感じ、どこかへ移動するのが分かる。
……私は初めて人が死んだのを見たせいなのか、気持ちが落ち着きません。
いくらアザゼルさんのおかげで気分が悪くなくなったとは言え、やっぱり良いものじゃありません。
さっき、アザゼルさんが暴走と言ってたけど、私の身近な人が死んだときは……私も……
「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝!!!」
唐突に聞こえてくる、轟音とも言える咆哮が聞こえてきた。
アザゼルさんが小さく、「マジか……」と呟くと、止まったのが分かり、目を開ける。
そこにいたのは……身の丈を余裕で越す程の大きさの黄金の戦斧を片手で振り回す、私と同じくらいであろう金髪の男の子の姿だった。
目は暴走してるせいなのか目が赤く、血の涙を流していた。
アザゼルさんが私を背にするように庇うと、男の子はこちらに気が付き、襲い掛かってきた。
しかし、アザゼルさんはそれよりも速く動き、その男の子にタックルし、どこかへと去って行った……。
……大丈夫かな…？

どのくらい経ったのか分からないけど、そんなに時間は掛からずにアザゼルさんが先程の少年を肩に担ぎながら帰ってきた。

たぶん、先程から激しい音が聞こえてたから二人で戦っていたのだと思う。

その証拠に、アザゼルさんはさっきとは違って少しボロボロで、担がれてる男の子はもっとボロボロでした。

日常生活では支障は無いんだろうけど、やっぱり心配になります。

「大丈夫ですか？」

「おう、大丈夫だ。動けるから気にすんな。……よかったな、仲間が増えるぞ」

「??」

アザゼルさんがニカッと笑い、私の頭を撫でてきて謎のことを言います。

仲間……？

あ！

さっきの斧は神器だったんですね？

けど、そう言うのはシェムハザや他のコカビエルさん以外の幹部が育てると聞いたので、実際に仲間なんですけど、なんか違うような気がしました。

ん？

さっきの男の子は黄金の斧を持っていました。

神器の中でも斧の形は少ないと聞きましたが……一つだけ、有名なのがありましたね。

そしてそれは、アザゼルさんが担いでる男の子が持っていたものと酷似しています……。

まさか……

「もしかして、さっきのは神滅具の獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）……ですか？」

「お、よくわかったな。しかし、困ったな」

「…何がですか？」

「これで三人目なんだよ。神滅具ってのは一つあるだけで世界の理を壊す。だから各勢力も神滅具所有者を危険視しているんだ。一応辺りには結界を張ってるから主神クラスじゃない限りはバレないだろうが……一勢力に三人も神滅具所有者がいるって事は、下手すりゃ他勢力と戦争になりかねん」

それって……私がいるからですか……？

「勘違いすんじゃねえぞ？何もお前のせいじゃない。そもそも、そんなものを聖書の神が創ったせいだ。それに、俺は好きでお前らを保護してんだ。お前が心配することじゃない」

「でも、私のせいで……皆が……」
「だから心配することじゃないっってんだろ?何のためにお前を外に出さなかったと思ってる?俺たちはそれを予想して、必死こいて他の勢力にまだ白龍皇だけを保護してるように見せてんだ。それに、他勢力がなんか言ってきたとしても、俺たちは無視できる。なんせ、表向きには保護してないんだからな」
「ありがとう……ございます」
私は弱々しい声でお礼を言い、アザゼルさんが戦闘を行ったため同じ所にいるのは危険だからと本部へと転移しようとしたとき、
「おい貴様、そのガキをこちらへ渡せ」
唐突に聞こえた知らない男の声。
その声が聞こえた方を向くと、知らない人達がいました。
けど、この雰囲気は前に一度だけ感じたことがあるから、その正体を察しました。
あれはーーーー
「よお、悪魔さん方。人攫い紛いのことはやめた方が良いぜ?」
「っ!……そう言う貴様は堕天使か。何故こんな所にいる?」
「おいおい、俺らがどこにいようと勝手だろうが。そもそもアメリカも他の神話の管轄だぞ?お前らが人に言えた口じゃ無いだろ?……それに、このガキはお前さんらに良

い印象は持ってないだろうな。お前らもさっきの惨状を見たならわかるだろ？」
アザゼルさんが煽るようにーーーー実際に煽ってんだけどーーーー悪魔さん達に言うと、悪魔さん達はこちらを凄い形相でこちらを睨んでいる。
だけど、私はコカビエルさんやバラキエルさんという人達のおかげであまり怖くありません。
二人とも……ごめんなさい。
状況は拮抗して数秒経とうとしたとき、悪魔さん達が動こうと……その足を止めることになる。
辺りに濃厚な殺意と魔力が彼らを襲ったのです。
その原因は……
「……何をしようとした？」
もちろん、アザゼルさんです。
跡で教えて貰ったのですが、彼らにだけ殺意が向くようにしてたらしく、魔力はうっかりだったらしいです。
それでも少しでも気を配ってくれたのはありがたかったです。
間違いなく、私はそれだけで死んでるでしょうから……。
悪魔さん達は驚愕の表情を浮かべながら身動きが取れ無くなり、中には膝を屈し

てる人もいました。
アザゼルさんはその性格のせいで勘違いされやすいですが、堕天使の人達を纏め上げる総督です。
ならば、必然的に堕天使の中でも最強の座に着いていないと、あの癖の強すぎる堕天使を纏め上げることなんてできるはずがありません。
このままどうするのかと思いましたが、アザゼルさんは一人の悪魔の胸ぐらを掴んで告げます。
「……よかったな、あいつがいてくれて。アイツがいなかったら俺は、お前らを皆殺しにしていただろう。お前達が今しようとしたのは戦争に発展してもおかしくないことだ。相手が誰なのか、よ～く見極めてから喧嘩を売れ。これ以上、そのきたねぇ面見せんな」
今まで一度も見たこと無い、怖い顔でした。
あれは、間違いなく怒ったときの顔ですが……アザゼルさんが怒ったのを私は見たことがありませんでした。
部下の人達が任務に失敗しても、実験が失敗しても、自身が怪我を負う羽目になっても、アザゼルさんが怒ることは一度もなく、ほとんどは笑ったり呆れたりしていたり、偶に苦悶の表情を浮かべるだけだったので、彼が怒る姿を今まで想像もしなかったので

す。
その姿が今、目の前にあり、何故怒ったのかは……言うまでもありませんが、戦争になりかけたからでしょう。
今の三大勢力は休戦状態という一時の平和で、まだ確実には終わっていないのです。
それが今、起こりかけたからあの人は怒ってるんだ。
アザゼルさんが言った内容は聞こえませんでしたが、恐らく脅迫なのでしょう。
悪魔さん達は恐怖で動けないのか、唖然として私たちを見ていた。
アザゼルさんが彼らを睨みながら、私の所へ戻り、本部へ転移する事になった。
ちなみに、この後アザゼルさんから謝られた。
確かに怖かったけど、私のために怒ってくれたんですよね？
なら、気にしてませんよ。
そう言うと、抱き着かれた。
1分経っても離れなかったので、ヴァーリ君が蹴りでアザゼルさんを私から離したので、そこからアザゼルさんとヴァーリ君の喧嘩が始まったけど、結局ゲームで決着を付けるんだから……仲いいですよね。
あ、あの少年は医務室に運んだので安心してください。

覚醒・黄金の獅子王（？）

どうも、兵藤一瀬です。

今私は未だに目覚めない、神滅具（ロンギヌス）の獅子王（レグルス・ネメア）の戦斧を持つ少年が眠るベッドの隣にいます。

一日経っても起きず、今日は授業だったのでそんなに疲れてもいないのを良いことに、彼の様子をこうして見に来ています。

夕食も食べ終わり、もしかしたら目覚めるかもしれないので、ついでにトレイに乗せて持って行ってます。

アザゼルさんや他の幹部の方々は基本的に忙しいので、私しか見れません。

ヴァーリ君も様子を見に来ていたのですが、1時間置きで鍛錬にしに行ってます。

そんな私は、いつ目覚めるのか分からない少年の顔を見続けていたとき、彼の瞼が動いた。

◇◇◇

……ここは……？

目が覚めると知らない天井だった。

「ハハッ、テンプレかよ」

「あ、起きたんですね。おはようございます。あ、夜だから、こんばんわです」

独り言のつもりだったので誰か返してくれるのを何も期待してなかったので、正直に驚いた。

声は女の子で、そっちの方を向くと、茶髪の短髪よりもちょっとだけ伸びた髪の、碧色の瞳を保った少女がこちらを見ていた。

え、誰？

俺が困惑してると、少女はポケットから携帯を取り出し、誰かに連絡する。

「もしもし、一瀬です。……はい。彼が起きました……はい。それじゃ、また後で」

そう切ると、再びこちらを見て話し掛けてくる。

「初めまして、兵藤一瀬です。貴方のお名前は？」

俺より一つ下であろう少女はそう聞いてくるが、俺は今、それどころじゃ無かった。

兵藤……兵藤だと!?

そんな馬鹿な、原作じゃ、そんな奴はいなかったぞ。

神滅具所持者は全員知ってるが……こんな奴はいなかった…。
なら、俺と同じか……？
「お前、転生者か？」
「……？てんせいしゃ……？悪魔へ転生したと言うことですか？でしたら、私は違いますよ。人間です」
「まじか……」
オリジナル……!?
一応、１６巻までは呼んでいるし、ｗｉｋｉである程度学習したが、少なくともこんな奴はいない……。
と言うことは……有り得ないはずの可能性を聞いてみる。
「お前は……赤龍帝か…？」
「!!!」
『ほう。どこでそれを知った？』
少女がかなり驚いた顔をすると、少女の左手からアニメや原作小説でしか見たことの無い、真っ赤な籠手が出て来て、そこから声が聞こえてくる。
間違いなくこいつが赤龍帝なのか……。
つか、よくよく見たら、イッセーが女体化したときに似てるような……。

なら、どういう事だ……？

一誠が女の子になった世界なのか…？

だが、それだとおかしい。

こいつが何故こんな場所にいるんだ？

少なくともここが病院じゃ無いことは分かる。

見た目は病室にそっくりだが、周りには見たこと無い機械や器具が並べてあり、病室に似たどこかなのだろう。

だけど、だとしても、こいつがここにいる理由にはならない。

こいつの家族に医者関係のやつはいないはずだ。

そして、次にまた質問しようとしたとき、後ろからガシッと首を捕まれた。

かなり……強い……後少ししたら首折れるぐらいに痛いぞ……。

下手に振り返れず開こうとした口を閉じると、後ろから声が聞こえる。

「いい加減に一瀬からの質問に答えたらどうだ？転生者君？」

聞いたことのある渋い声。

途端に首から手が離れたので急いで後ろを振り返ると、前髪だけが金髪でそれ以外は黒髪のダンディな男が前が開いているスーツを着て、そこには立っていた。

小説やアニメに出て来たあまりにも酷似していたため、心当たりは一人しかいなかっ

た。

その名は……

「アザ……ゼル……様…？」

「一応様付けはすんのか。まあ、はいよ、アザゼル様だ。それで、早速で悪いが……お前は何モンだ？」

堕天使の組織神の子を見張るものの総督であるアザゼル。

原作だと主人公を何度も支えてきた重要人物の一人だ。

いったい……いつからいた、とかはやめとこう。

仮にも一勢力のトップだ。

こんな事造作もないだろう。

しかし……なぜ俺はここにいて、こんなにも敵意を剥き出し……もしかしたら転生者のことを知ってるっぽいし、何かやられたのか？

あれ、待て……なんで俺はここにいるんだ？

「貴方方の質問には答えます。ですが、一つだけ良いですか？」

「なんだ？」

「俺はどうして、ここにいるんですか？どうも記憶があやふやで……」

俺がそう言うと、空気が変わった。

もしかして、何かヤバかったのだろうか。
すると、アザゼルが話し出す。
「……結果だけ言わせて貰う。お前は悪魔に家族を殺されて暴走した。そこを俺が止めてここに連れてきたんだ。」
……思い出した。
確か、俺が獅子王の戦斧に目覚めたあの日、周りが森だらけなのを良いことに少し遠くで斧の扱いをある程度慣れようとしていたんだ。
中に封じられていたネメアの獅子からも助言を頂いたりして、ある程度扱えるようになってから家に帰ったんだ。
だが……そこで待っていたのは悲劇だった。
俺には母と父、そして妹がいた。
妹はまだ最近歩けるようになったばかりで、俺も可愛がっていたのに……全員が肉塊になっていた。
最初はそれがなんなのか理解できなかった。
いや、しようとしなかった。
認めたくなかったからだ。
そんな俺の気持ちなどつゆ知らずに、俺が恐怖で震えてると勘違いした、あの悪魔は

ほざいた。
「貴様もこうなりたくなかったら、俺の眷属になるが良い」
最初はこいつ何言ってんだ?って思った。
けど、その言葉の意味を徐々に、徐々に理解していき、何かが切れた。
そこから……意識が、消えたんだ。
俺はそれをアザゼルに教えると、頭を撫でられ、謝られた。
「すまなかった」
「え?」
「お前がこんな目に遭うことになったのも俺らの神がそんなものを創ったせいだ。今は亡き神に代わって俺が謝罪する」
「な、なんで……ですか?貴方は何も悪く無いじゃないですか」
「確かに全部創ったのは神だ。だが、そうじゃない。間接的にもお前がそれを実に宿すことになったのは……俺が先代の獅子王の戦斧所有者を殺したからだ」
「!?」
は!?
原作だとそんなこと書かれてなかったぞ!?
……どういう事だ?

「先代は元々、人外に喧嘩を売るが殺しはしない戦闘狂だったんだが、どういう訳か、いつの日からかあいつは悪魔に洗脳されていてな。堕天使や天使を集中的に襲うことが多くなった。友でもあった俺はそれが許せなく、そいつを殺した。あいつが死んだ年とお前が産まれたであろう年から考えると、合点もいく。すまなかった」

原作では描かれなかった先代所持者との関係。

なるほど、アザゼルが殺してたのか。

だけど……

「貴方は悪くありませんよ。貴方は正しきことをした。俺が憎むのは俺の家族を殺した悪魔達です。少なくとも、貴方や堕天使たちを恨みはしません。それでこの話はお終いです」

「だが……」

「良いんです。今度はそちらの番です。これはお礼みたいな物です。返しきれるかは分かりませんが……」

「そうか……。ならそうするか。だが、一つだけ言わせて貰う。困ったことがあれば俺に言え。それが最大限の譲歩だ」

「……本当に優しい人だ。では、分かりました。それで手を打ちましょう。それで、何が聞きたいんです?」

「なら、さっきドライグも聞いていたが、お前は何者だ?」
うん……。
たぶんバレてるだろうし、ここは素直に答えよう。
「俺は転生者という、こことは違う世界から来たものです」
「違う世界というと……ここは全くの別世界か」
「端的に言うとそうです。けど、そんなに変わらないんです。ほとんどはここと似ていますが、一つだけ違います。この世界が俺たちの世界だと小説だということです」
「ほう……」
「疑ってるのは分かります。ですので、聞きたいことがあれば、可能な限り答えます。可能というのは決して隠してるわけではありません。知らないこともあるからです」
「なるほどな……。んじゃあ、まずは……この世界のあらすじを聞こうか?」
あらすじか……。
一先ずは軽くは信じてくれたんだろうけど、一勢力のトップに話していいのか?
いや、たぶんそういうの好きそうだし、問題ないか。

俺が軽く説明すると……肩を震わせて笑っていた。

いやまあ……そりゃあ誰だってあのあらすじは衝撃だよ。
あそこまで欲望に正直な主人公は中々いないからね。
ふと、気になって後ろを見ると、兵藤一瀬という女の子は後ろから現れた銀髪の美少年に耳を塞がれていた。
少女は不思議そうに此方を見てるのに対して、後ろの少年は、メンチ切ってた。
ごめんね、俺も話したくて話してるんじゃ無いんだよ。
「なるほどな……。本来なら兵藤一誠が主人公をなのか」
「はい……。そのはずなんですけど……」
「ん？」
「そこの……兵藤一瀬は、何ですか？」
「そいつは、駒王町で捨てられてた所を俺が拾った」
「……マジで？」
「マジで」
あれ？
もう原作崩壊してないか？
というか、さっきから少女の耳を押さえてる男の子……あれ、ヴァーリだよね？
うん、してたわ（確信）。

堕天使陣営に赤龍帝と白龍皇がいるってどうなってんだ……マジで…。
あ、俺獅子王じゃん……。
やだー……。
俺がこれからの未来に頭を悩ましていると、アザゼルさんが色々と聞いてくる。
「お前から見たら、主人公はやっぱり一瀬なのか」
「そうですね。けど、ここが神の子を見張る者の時点で本来の道筋からハズレてるんですよね」
「まだ原作は始まってないんだろうけど……何巻ぐらいあるんだ?」
「…本編は全二十五巻まであって、そこから続く感じで『真ハイスクールD×D』という名前で三巻だけ出てます。番外編で『ハイスクールD×D　DX』で五巻だけで、漫画やゲームも出てるんですけど詳しくは知らないです。アニメは四期まで続いていて、小説の十巻までになります」
「へぇ……じゃあーーーー」
「おいアザゼル。転生者とはなんだ?」
突然、ヴァーリから遮られた。
あ、ヴァーリには話してなかったのか。
けど、アザゼルには焦りの表情はなかった。

寧ろ、好機ができたような顔をしていた。
そして、話し出す。
「そういや、話してなかったな。転生者というのは、俺らが見つけ出した……異世界の存在だ。どうもグレードレッドにもその存在を認識させずにこの世界にやってくるらしい。だが、魂だけだから赤ん坊から人生を始めなきゃダメになるがな」
「……もしかして、私から家族を奪ったのも……！」
「よく気づいたな。正解だ。一誠は間違いなく転生者だ」
「まじか、一誠が転生者か……。しかもオリジナルを追い出すかよ……」
今の話の流れから察したよ。
一瀬は転生者から家族を奪われたのか……。
いや、他にもあるんだろうけど……アザゼルが敵意を剥き出しにしていたのはそのせいか。
そりゃ、誰だってそれっぽい奴は疑うよな。
だが、俺は怒っていた。
「そいつは間違いなくクソ野郎ですね。どうせ、前世モテなかったから、二次元の世界で楽してモテようとするとか、原作愛読者からしたら最低極まりないですね」
「お前は違うのか？」

「心外ですね。俺はモテようと思ったことはありませんよ。そもそも、原作だと俺死んでるんですからね?それでどういうわけか独立具現化した獅子王がサイラオーグ・バアルに拾われるんです」

「俺が拾ってなかったらそっちに行ってたのか……。危なかったな。って、おい今なんつった!?」

「ゴフッ!」

突如として肩を捕まれたと思ったら揺さぶられた。

吐く吐く!!

「獅子王の戦斧は独立具現型じゃないはずだ!封印されてる奴が自らの意志で行動できるようになったのか!?なら、その切っ掛けは……」

『違うぞ、堕天使の総督殿』

突如として聞こえた新たな声。

それはベッドの横にいつの間にかかけられてあった黄金の斧から聞こえてきた。

それは何度も聞いたことがあり、ある意味師匠とも言える存在だ。

「獅子王か」

『そうだ。我は最初からどちらにでもなれたのだ。ただ、我がこの情報をひたすらに隠していただけだ。ただでさえ、極めれば地を割るとも言われた斧が具現化したらどう

なるかは分かるだろう?』

「確かにな。警戒が強い神話をお前を壊そうとしてくるかもな。だが、お前なら対処できるんじゃないか?」

『我を買い被りすぎだ。我はそこまで賢くない。その証拠に歴代所有者達は碌な死に方をしなかった。それガ、ほんの少しでも道が変われば救いようがあったというのに……』

獅子王……。

お前…そこまで……。

獅子王は俺が原作知識を話した一人目の相手だ。

だが、彼はそれを素直に受け止め、更に気分が良さそうなオーラを出していたのは、そのせいだったのか……。

俺がその運命を変えてくれるかもしれないとお前はそう思っていたのか……。

「獅子王……よしじゃあ、獅子王の願いでも叶えないとな。だが、その前には一つやる事があるが、その前にお前は飯食って今日は寝とけ」

「……えっと、ありがたいんですけど……何をするつもりですか?」

俺が不安げながらそう聞くと、アザゼルはニッと笑い、一瀬のほうを指差しながら言う。

「一瀬との模擬戦だ」

戦闘・獅子王ＶＳ赤龍帝

どうも、兵藤一瀬です。

今、いつもの訓練場にいるのですが、いつもと違うのは、その相手です。

いつもはコカビエルさんなのですが、今回は金髪の碧眼の男の子、名前はオリバー・クレージー。

今代の獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）の所有者です。

何故、オリバー君と模擬戦をする事になったのかというと、アザゼルさんがオリバー君の実力を測りたいと言い、実力が近いであろう私がする事になりました。

正直、負ける気しかしないです……。

私のは身体能力や魔力を倍にして行く神滅具（ロンギヌス）で、彼方は最初から強力な攻撃力を携えてる神滅具です。

お互いの武器の等級は一緒。

決め手になるのは、所有者の技量次第……遺書書いとけば良かった……（泣）

コカビエルさんから一本取ったことがあるとは言え、あまり自信がないです……。

はぁ……頑張っていきます。

◇◇◇

訓練場に佇む赤龍帝と獅子王を端から見る複数の存在がいた。
一人は神の子を見張る者の総督であるアザゼル。
更に、その幹部であるコカビエルとバラキエル。
白龍皇ことヴァーリ・ルシファー。
堕天使の重要戦力がそこに集まっており、下っ端達が見ればどこかの他勢力に交渉しに行くことを思わせるようなメンバーだった。
たが、彼らの目的は二人の子供の実力を見極めることだった。
獅子王であるオリバー・クレージーは、強くなって獅子王が見てきた運命を変えることを目的として、ここに所属することを決めた。
対する赤龍帝である兵藤一瀬は、転生者に家族を奪われ、それを強くなって取り戻して食卓を囲んでご飯を食べる事を夢見て、ここにいる。
二人は己の願いを叶える代わりに、その力を神の子を見張る者に貸すことで住む事を許可したのだ。

審判はアザゼルが務め、ある程度離れていても状況は理解できるため、彼らが全力を出せるように敢えて離れている。
そして、開始の合図が告げられる。
「始め!!」
アザゼルがそう言うと、最初に動いたのはオリバーだ。
オリバーは神器によって強化され、人間では有り得ない程の瞬発力を用いて一瀬へと迫った。
対する一瀬は動く気配は無かった。
彼女が教わったのは基本的に対人戦だ。
特に一対一の状況についてはこの一年でかなり学んでいるため、自分から動くことは自殺行為だと分かっていたからこそ、動かなかったのである。
そして、黄金の戦斧が振り上げられ真上から振り降ろされるが、彼女はそれを軽いステップで横に躱し、斧はそこまで力を込めてなかったからかすぐに追うも、既に届かなく空を切る。
次に動いたのは一瀬だ。
彼女が狙うのは首筋。
コカビエルから教えて貰った、人間の急所を常に狙うように、彼女はバレないように

倍加した身体能力を持って彼の首筋を狙う。
しかし、片手で持った斧で防がれ、彼の空いているもう片方の拳で一瀬へと襲いかかる。
一瀬は予想外だったのか、慌てて片腕でガードするも、衝撃を受け流しきれずに吹き飛ばされる。
何とか足で勢いを止めて、前方を見ると、既に此方へ来て斧を振り下ろすオリバーがいた。
一瀬は更に倍加を掛け、相手が斧を横に振り下ろした瞬間、それをしゃがんで躱し、かつてアザゼルがやったようにオリバーへタックルした。
オリバーは蹴りで防ごうとするも躱されタックルをもろに受けてしまう。
タックルは勢いを止めず、壁へと激突される。
受け身を学んでいないオリバーはいくら身体が強化されてるとは言え、相手は徐々に身体能力が倍加していくのだ。
流石に攻撃力と防御力に定評のある獅子王の戦斧だろうと、禁手（バランス・ブレイカー）に至ってない限り、この攻撃には耐えられない。
壁にぶつかった衝撃よりも一瀬と壁に挟まれた衝撃の方が強く、肺から問答無用で息が吐き出される。

「かはっ……！」

それだけで意識が持って行かれそうになり、思わず膝を屈する。

……一瀬は自分のことを過小評価する癖があるが、彼女の実力は禁手なしでコカビエルから一本を取れるのである。

かの三大勢力間で起きた大戦時から生き残り、聖書にも名を記されている堕天使の中でも幹部に選ばれるほどの男に、だ。

しかも彼は生粋の戦闘狂だ。

相手が強ければ強いほどに厄介さを増すことで有名な病気とも言える性格の持ち主で、恐らく堕天使の中でもトップクラスの戦闘経験を持つ者だ。

一瀬は一本しか取れないと残念がっていたが、本人は加減されてるからと思い込み、まだまだだと思っているが……とんでもない。

寧ろ、永い時の経験で研ぎ澄まされた化け物染みてる戦闘センスをしているコカビエルに一本を取れるのは彼と同じ幹部クラスじゃないと厳しいのだ。

中には上級堕天使でも取れる者はいるが、それは自滅覚悟で挑んでこそだ。

コカビエルが教えてるのと何度も模擬戦をしてるのもあるが、それでもコカビエルから一歩を取る彼女は異常なのである。

しかも、禁手なしでこれなのだ。

至ったときには間違いなくヴァーリと同等以上に強くなれるだろうと、壁際にいる者たちは予想しているぐらいに、彼女は強い。

たかだか目覚めて数日も経っていないオリバーが約1年間修業に明け暮れ、天然の戦闘センスを宿している一瀬に勝てる可能性は限りなくゼロに近いのだ。

このまま終わってもおかしくはない状況だが、オリバーは立ち上がった。

「つぇーなぁ……。過小評価しすぎじゃねえのか？」

「……私は他の人達と比べたら弱いんです。皆を守るには、私がもっと強くならないといけませんから……」

「少なくとも四桁前半に行くくらいに、お前は強いよ。もっと自信を持てよ。じゃないと……死ぬぞ？」

目の前からオリバーの姿が消えた。

否、視認できないスピードで移動しただけだ。

その証拠に、壁際の四人には彼のスピードを眼で追っていた。

一瀬は驚きはしない。

なんせ、ここではそれが普通なのだから。

アザゼルやコカビエル、バラキエルの全速力など彼女は見えたことがない。

そして、それは今も、彼女自身は眼でオリバーを追えない。

その代わりに他のものに頼るしかない。
それは、持ち前の直感と、コカビエルから学んだ、考えるな感じろの精神で相手の動きを察知し、限界まで倍加した脚力による回し蹴りで、後ろから襲い掛かる拳を迎えた。
だが、一瀬はここで気付いた。
彼の持っていた斧がどこにもないことに。
どこだと探してると、ふと風切り音が聞こえた。
反射的にそちらを向くと、上から斧が降ってきていたのだ。
彼は姿を消した時に自身を囮に使い、斧で逃げ道を塞いでいたのだ。
横に避けては拳が襲い、上に避けようものなら斧の餌食になる。
なら、答えは簡単だ。
斧を掴んで相手に投げ付ければ良い。
一瀬は上から降ってくる斧の柄を跳んで掴み、大きく振りかぶってから勢い良くオリバーに投げ付けた。
「ちょ！はぁ!?」
横向きに来る斧をオリバーは跳んで躱すも、それが決定的な隙となってしまった。
限界まで身体を倍加させた一瀬が目の前にまで迫っていた。
オリバーは咄嗟に腕をクロスさせてガードするも、一瀬が繰り出す拳の衝撃で腕が弾

かれ、先に地面に着いていた一瀬ががらんどうになった鳩尾に容赦なく発勁を撃ち込んだ。

オリバーはこの瞬間に意識を失い、衝撃で四回ほどバウンドして壁に激突し、地面に倒れた。

その瞬間、アザゼルから告げられる終了の合図。

「そこまで！」

一瀬はそれを聞くと仰向けに倒れる。

一瀬の体力はそこまで少ない訳じゃないが、思考するのに体力を使ったのと、限界まで肉体を倍加していたのもあり、身体が耐えきれなかったのだ。

アザゼルはそんな彼女へ近づき横抱きで彼女を医務室へ運び、コカビエルはオリバーを肩に担いで医務室へと運んでいった。

ちなみに、この翌日からオリバーは一瀬を姉貴、ヴァーリを兄貴、アザゼルを先生、コカビエルを師匠と呼ぶようになった。

バラキエルとシェムハザだけはさん付けのままだったらしい。

発見・偽赤龍帝

どうも、兵藤一瀬です。
あれから三週間が経ち、どうなったかと言いますとオリバー君が私と一緒に訓練に参加する事になりました。
最初は走ってる途中で吐いちゃったり身体が動かせなくなって倒れちゃったりしたので、医務室まで運んだり看病したりするのは大変でした。
だけど、徐々にその数も減っていって最近となっては吐いたり倒れたりすることは無くなりました。
それでコカビエルさんから偶に神器を使わないで模擬戦をしろと言われたので偶にしてます。
凄いですよ、武術だけしか分かりませんが、ドンドンと追い付かれつつあるんです。
こないだ何本か取られましたからね。
神器使ったら流石に負けませんけど、無かったら普通にぼこされてと思います。
神器って凄いですね。
そんな風に過ごしていた私ですが、昨日アザゼルさんから来るように呼び出されたの

で、アザゼルさんの部屋にいます。
理由は一緒に呼び出されたというオリバー君が来てからだと言います。
だからずっと待っていると、オリバー君とアザゼルさんが一緒に来ました。
「待たせたな。少しばかりこいつと話があったんだ。じゃあ、オリバーはそこに座れ」
「分かりました」
そう言われ座ったオリバー君は私の机の向こう側で、その横にアザゼルさんの専用机がある形で話し合いが始まろうとしていました。
「んじゃ、早速だが……一瀬。〝奴〟について話したいことがある」
「……っ!!」
アザゼルさんが言う〝奴〟というのは、私から家族を奪った一誠という謎の男。
アザゼルさんが前々から調べているというのは聞いていたので、やっと知れるという喜びと予想より速かったので驚きました。
後数年は掛かると思っていましたが、流石ですね……。
「まず、あいつの戸籍を調べたが、全てお前と同じだった。つまり、お前の上に上書きされたのだと思っている」
「これは俺の予想なんだけど、一誠は死んだときに神さまと会ってるんじゃ無いかな？異世界へ転生する際によく神さまから得点貰うのがセオリーなんだけど、生憎と俺は

会ったことが無い。あっちの世界じゃ俺は一般人で普通の高校生で、気付いたときには赤ん坊でこいつの力を知ったのはあなたたちと出会う一週間前ぐらいなんだ」

オリバー君がいた世界ってそういうものが普及してたんですね。

異世界へ行くなんて言う発想はどうしたら浮かぶんでしょうか？

『主の反応は実に面白かったが、最初は言ってることが分からなかったな。『嘘だろ!?ここハイスクールD×Dの世界かよ！しかも俺が獅子王かよ!!』とな、それ以外にもいくつか叫んでたな』

「あの時はマジでテンパったからな……。あ、話逸れちゃったけど、その一誠は暫定〝神さま〟によってこの世界へ来る際に戸籍を全て姉貴の物に書き換えたんじゃ無いかって思ったんだよ」

「一応俺らも出来ないことはないが、ここまで違和感なくはできないな。それで、オリバーから教えて貰ったが、一誠は異世界転生とやらをして、複数の特典を貰ってる可能性が高いと見てるんだ。その一つは言わなくても分かるだろうが、赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）だ」

『ふん！俺の力を模倣するとはな……余程俺を怒らせたいらしいな……！』

つまり、一誠は元からあった私の存在を上書きして私に成り代わって、私と同じ赤龍帝の籠手を所持してる上にまだ強い力を持ってるかもしれないということらしい。

オリバー君も転生者だけど、獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）しか持っていないとのことです。

転生者とは言っても全員同じというわけではないんですね。
ドライグさんはさっきから怒ってるし、もし一誠の持っている赤龍帝の籠手にも同じドライグさんがいたらどうなるんでしょう……。
「それで、まだ情報があるんだが、これは朗報だ。〝奴〟が持っているであろう〝特典〟の情報を部下が持ってきてくれた」
『!!??』
これにはアザゼルさん意外全員驚いていました。
凄い優秀じゃないですか！
「奴が小学校に通ってる間に部屋を調べさせて貰った。見てくれ」
アザゼルさんがそう言うと、部屋の中にあるカーテンが閉まって明かりが暗くなり、部屋の隅の天井からスクリーンが下りてきました。
そして、そこには画像が浮かび上がっていました。
書かれていたのは、
『自分の能力
・赤龍帝の籠手
・無限の魔力
・変身能力

・不死

・『覇龍』を使っても暴走しない』

そこには子供のような文字で神に描かれていたものがありました。

これは私でもチートだと思いますよ……。

「ハハハハハ!!馬鹿だ、こいつ!!自分が考えた最強の自分てか?その程度じゃ、いくらでも倒せる方法はあるぜ。心配して損した」

『確かに、無限の魔力があろうと魔法や魔術を覚えてなかったら意味が無い上にそもそも体力が無かったら意味がないだろう』

オリバー君とレグルスさんの評価が辛辣です。

だけど……そうですね。

私だって結構死にかけながらも鍛えて赤龍帝の籠手を使いこなせるように頑張ってるんですから、最初からこんな物を持ってる人が自分を鍛えようとするとは思えませんでした。

『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）』を使いこなせるのは確かにかなり脅威だと思います。

あれは歴代の二天龍所有者の最後に使う力としてよく知られていて、歴代所有者の怨念が籠もっているせいでよく暴走するのだそうです。

しかし、地力が低かったら意味がありません。

「それで、後で見せるが〝奴〟が訓練してる様子もあったらしいが、お前達がやっている物に比べればお遊びだ。つまり、お前達より弱いが……不死という厄介な物を持っている。恐らく耐久戦で負ける可能性も否定できない。が、そんなもん幾らでも対処できる。それでだが、オリバーは俺が何をしたいか知ってるんじゃないか？」

「……先生、まさかとは思いますが、貴方は」

「おう、俺は悪魔と天使の奴らと一緒にあいつを潰そうと思う」

『!!?』

その事に私たちは驚いた。

先生がまさか、戦争を始めようと考えていたなんて……。

「本当なら俺もしたくないが……悪魔や天使共の馬鹿やらかしたせいで堕天使（俺たち）まで滅ぶのは納得いかない。だから、俺たちはずっと他神話勢力と交渉をしてきたんだ。安心しろ一瀬、誰も死なせはしない」

アザゼルさんは私にそう言うと頭を撫でてきました。

嬉しいですが、誰かが傷つくのは嫌なんですよ……？

「すまんな。それだけは無理そうだ。だが、死なないだけマシさ。それに、日本神話とケルト神話にはもう話が着いてるんだ。この調子で最低でも二、三勢力とは話を付けて、俺たちの今後も考えてるさ」

「……分かりました」
ならば、と前々から考えていたことを伝える。
「なら、私も出ます」
「……！」
『アザゼル、止めてくれるなよ。今の言葉は一瀬がずっと考えて、漸く出した結論だ。俺の忠告も受け入れて尚決意を変えなかったのだ。それを否定してくれるなよ？』
ドライグさんの言葉にアザゼルさんは言葉が止まる。
次に口を開いたのはオリバー君でした。
「良いのか？お前は戦争したく無いと思っていたが……」
「うん。私はしたくない。けど、私だけの我が儘で、止められるものを止められなかったって、後悔はしたくなかったから……」
『……強いな、一瀬は』
『当たり前だ。ベルザードと同じくらいに最高の相棒だからな』
それぞれが思い思いに話す中、アザゼルさんが頭を掻きながら口を開く。
「ハァ～。分かったよ。認めてやる。だが、後悔すんなよ？」
「勿論です」
アザゼルさんの言葉に決意を持って頷く。

それにアザゼルさんは私たちに告げる。

「とは言え、最上級悪魔程度は一撃で葬れるようにはなんないと話にならねえ。更に厳しくなるぞ。覚悟しろ!!」

『はい!!』

それから少ししてお開きになりましたが、アザゼルさんの部屋から少し離れた所でオリバー君にある疑問を聞きました。

「オリバー君は戦争に賛成だったんですか?」

「……まあ、そうだな。原作の悪魔達とは異なる世界らしいからな。あの戦争を避けるために動いていた先生があそこまで言うなんて、余程のことだ。なら、俺は拾ってくれた先生のために動くさ」

そんな理由があったんですか……。

それを言ってるときの彼の顔は少し暗かったです。

やっぱり、小説の世界に生まれたのに、内容が違う上に主人公の陣営と敵対するのは複雑なんでしょうか?

私がそう考えてるのが顔に出ていたのか、唐突に話題を転換して色々な話をしてくれました。

それから自分達の部屋に付くまで原作の話を聞きました。

私もそんな原作の世界に行ってみたいと思いましたが、録でもないことになりそうだと本能がうるさかったです。

しかし、この時……あんなことになるなんて少しも予想出来なかった。

２年後、邂逅・邪龍最凶

それは突然だった。

ある日、珍しく外で魔獣を狩ることになり、目的の地に着いては色々な魔獣を倒していたんですが……

「あれ？」

「姉貴！」

「一瀬!!」

唐突に私の足元に変な空間が現れ、咄嗟のことで理解でず、体が動かせなかった。

オリバー君とコカビエルさんが必死に手を伸ばすが時既に遅く、私は静かに落ちていった。

それで、半年前にやっとできるようになった禁手（バランス・ブレイカー）、赤龍帝の鎧（ブースティッド・ギア・スケイルメイル）を発動して急いで上に飛行しようとしたけど、既に穴は閉じていて出ることは敵いませんでした。

どこか、別の出口を探すけれども上下左右全て同じような不気味な空間でそのようなものは見つかりませんでした。

ここはどこなんでしょうか…？

そう疑問に思うと、ドライグさんが話してくれた。
『まずいな……。ここは次元の狭間。一定の力を持っていない者だと短時間いるだけでも体が崩壊するが、何とか禁手化と俺の力でそれを防いでいる。急げ、それもそんなに長くは保たない』
「分かりました。……けど、何でそんな場所にいるんでしょうか…？」
『極稀に、次元の狭間が不安定になると世界の何処かに穴が空くと聞く。どこかに……出口は無いのか……』
「これは面白い事が起こってるな」
『!?』
私とドライグさんしかいない空間に突如として交ざってきた第三者の声。
誰ですか!?
そう思い、そちらを向くと……金色と黒色が入り乱れた髪で、双眸は右が金で左が黒という特徴的な黒いコートで身を包んだ男の人が立っていた。
……確か、ヘテロクロミアと言う一種の病気なんでしたっけ？
そんな風にまじまじとその人を見てると、ドライグさんが怯えたように忠告する。
『相棒逃げろ……。今のお前じゃ、相手にもならない奴だ……』
「…？ドライグさん……それどういう……？」

『そいつの名はクロウ・クルワッハ……。邪龍と呼ばれる奴らの中でも最凶と呼ばれるものだ。前に滅んだと聞いていたが……生きていたのか』

「それは勝手な憶測だな。俺は他の奴らとは違い一度も滅んだことは無い。キリスト教の奴らが煩わしくて引っ越しただけだ。そして……久しいな、ドライグ」

『ああ……本当に久し振りだな、クロウ。だが、何故こんな所にいる？』

「冥界へ行く途中だったのだ。次元の狭間を通るのが一番速い。……ここで話すのも難だ。連れてくぞ」

「え？わっ…！」

ドライグさんとクロウ・クルワッハさんさんの会話に付いていけず、聞くに徹していたら肩に担がれました。

私が動揺してるのにも関わらず、彼は物凄いスピードで何処かへと向かいました。

「きゃあああああああああ!!??」

ひいいいいいいいいいいいいい!?

なんなんですか!?

アザゼルさんより速いいいいいいいい！

『そろそろ出られるぞ』

ドライグさん、なんでそんなに冷静なんですか……流石二天龍です。

そう思ってると、スピードが急に緩くなり、辺りを見回すと冥界の森の中でした。

えーー……。

こうもあっさりと着くんですね……。

『いや、普通は無理だからな。こいつのやり方が横暴すぎるのだ。なんだ、超スピードで冥界に移動するなんて……。お前は○ック・トゥ・ザ・○ーチャーか』

「ドライグさん、あれ結構好きですよね」

この間、アザゼルさんから色んな映画のＤＶＤを借りていたのですが……ドライグさんが車で未来へ行く映画にハマって、あれから週１でシリーズ毎に見てるんですよね…。

ロバート監督……あなたは二天龍が気に入るほどの映画を作りましたよ…。

「あれは実に良い。超スピードで未来に行くという発想は流石の俺でも思い付かなかった。あれは…俺に新たな希望を与えてくれた…！」

「あ、見てたんですね…」

……ドラゴンって、あー言うのが好きなのかな…？

アザゼルさんが、ドラゴンは未知だって言うし……あ、アルビオンさんは○イルドスピードで興奮してましたね…。

ヴァーリ君はＭＡＲ○ＥＬ作品全般だし……あ、私ですか？

私はですねーーーーー

「ところで……お前達こそ何故あそこにいたのだ？後少ししていたら消えていただろ？」

クロウさんが私たちにそう聞いてきました。

そう言えば話してませんでしたね。

そう喋ろうとしたとき、ドライグさんが先に答えます。

『元いた場所に突然あそこに繋がる穴が空いてな。それにうっかり落ちてしまったんだ』

「申し訳ないです…」

私が咄嗟に動ければ良かったんでしょうけど……動けなくて申し訳ないです……。

クロウさんはほれを聴き、何か考えるような仕草をした後に、ふっと笑って口を開きました。

「…そんな事もあるのか。まあ良い、本来なら戦ってみたいが……やめておこう」

『見ないうちに、随分と丸くなったな。以前のお前ならなり振り構わず勝負を挑んでいただろうに』

「俺はずっと冥界と人間界を往来してきた。その中でも学ぶべきことがあった。ただ

それだけだ」

『……お前を変えるほどか』

クロウさんは昔に何かやらかしたみたいで、ドライグさんはそんな彼がここまで大人しくなっていたことに驚嘆してました。

どうやら彼はヴァーリ君やコカビエルさんと似た人のようです。

「俺じゃ無くてもそうさ。アジ・ダハーカもアポプスも変わった」

『なんだと!?あいつらも生きてたのか?』

ごめんなさい、誰ですか?

どこかで聞いたことがあるような気はするんですが、ドラゴンの分野は全然分かってないんです。

すると、ドライグさんがこっそりと教えてくれて、邪龍という各神話の中でも凶暴で危険視されたため討伐もしくは封印された者達の総称らしいです。

その中でも最凶ってクロウさんは何をしたんですか……?

そして、今出て来た二人は邪龍の中でも真っ先に名前が出て来るほど有名で、クロウ・クルワッハ、アジ・ダハーカ、アポプスにだけは出会うな、と言われるほどらしいです。

本当に何をしたんですか……?

「奴らは封印されてた所を俺が解いて色々と連れまわしてるだけだ。最近は離れて〇

ｏｕＴｕｂｅｒをしてると聞いたな」
「ドラゴンが○ｏｕＴｕｂｅ……？」
あ、でもドライグさんとアルビオンさんが組んだら面白そうですね。
しかし、ドライグさんは呆れながらも、疑問を抱いていました。
『世も末だな。しかし、あの戦闘狂共をそこまで変えるとは……何があった？』
「普通にゲームにハマっただけだ。○ルダの伝説や○マブラなど、様々なゲームの実況をしている。ちなみに名前は、邪龍兄弟で己の名を変えないでやってるな」
「あれ？見たことある……」
『まさか、あいつらが……？画面越しのせいで気付けなかったのか…？』
最近、有名になり始めた二人組の男性で、黒と紫の混じった荒っぽい性格で何故か紳士服を着ていて、もう一人は冷静で口数は多くないけど、何故か祭司服を着てるのに口が悪いという独特な雰囲気な上に、上手な実況や卓越した技術で視聴者を虜にしてる人達だ。
最近、私も彼らの動画を見ており、アポプスさんのボケとアジ・ダハーカさんのツッコミの漫才が面白くて何回か繰り返しで見る事もあります。
「まさか、赤龍帝がファンだったとはな。今度あいつらに紹介するから一緒に出てみるか？一回戦う必要はあるかもしれんがな。……それで、いつまで鎧ってるつもり

だ？」

「あ……」

すっかり忘れてました。

言われて速めに禁手を解き、左手に籠手だけ展開してクロウさんに向き直ります。

「失礼しました」

「気にしていない。しかし、その年でよくあれだけ保ったな？」

「はい。トレーニングは欠かさずしているので」

『……そうだな』

クロウさんの質問にそう答えるも、ドライグさんが歯切れ悪そうに同意します。

…何か変でしたか？（↑その年でするトレーニング方法がえげつない事に本人は気付いていない）

「そう言えば、こんな所にいて良いのか？いくら赤龍帝と言えども何処かに所属してるんじゃないのか？」

『あ』

しまった！

連絡を一回もしてないから皆にどこにいるのか教えてなかったんだ！

携帯は……しまった、訓練中だったから置いてきてたんだ…。

念話は使えないし、通信手段一個も保ってなかった……。
私はそれに気づき……ガクッと四つん這いで落ち込んでしまった。
ドライグさんはアルビオンさんに伝えられるかも知れないけど、それは近くにいるとき限定。
ここが神の子を見張る者（グリゴリ）から離れてる場合、一切使えない。
実際に試したけどダメでした。
どうすれば……。
そう思ってると、クロウさんが提案してきました。
「なら、俺が送ろうか？」
『なんだと…？』
ドライグさんは予想外だったのか、驚きの声を揚げました。
正直私も驚いてます。
まだ会ってそんなに時間とあっていない人にそこまで親切にするのでしょうかって。
それに、それが意味するのは主に二つ。
勢力に与するか殴り込み。
コカビエルさんから教えて貰いましたが、
けど、クロウさんはあっけらかんと答えます。

「まあ正直、何処かの勢力に行くのは俺自身乗り気では無い。だが、俺も後ろ盾は持った方が良いと思ってな。そろそろ行動するのにも限界が来はじめてな。アジ・ダハーカとアポプスは自ら弱体化の魔法を掛けてその正体をバレないようにしているが、そちらも限界が近くなってきたと先日連絡が来たんだ。なら、お前達が居るところに厄介になろうと思ってな」

『昔のお前からは想像も出来ないような台詞だな。しかし、良いのか？罠かもしれんぞ？』

「あるわけ無かろう？それは俺に喧嘩を売るということだ。各神話連中でも危険だと謳われた俺にそんな事をする輩がいるとは思えん。その上、俺を戦力にする方が得だろう。それに、そこまで言わずとも……お前の主、一瀬だったか？俺を騙すほどの演技力の持ち主だったら驚くが、きっとそれが素なんだろ？俺が凶暴な邪龍と知りながらも普通に話すことが出来るのはそう多くない。なら、変なところだったらドライグが必死に止めてるはずだ。それでもいると言うことは、お前達がいる組織は問題ないはずだ」

なんか……こそばゆいですね…。

神の子を見張る者が褒められてるのは嬉しいんですけど……次のなんて話したら良いか分からなくなってきました……。

『まあ、お前じゃなくてもそこまでは分かるが、本当にいいのか？』

「無論だ。これから転移魔法を使わせて貰うが、ちょっと記憶を借りるぞ」
「え？」
クロウさんの手が私の頭に置かれた瞬間、頭の中が不思議な感触で満たされる。
気持ちいいような気持ち悪いような……そんな矛盾している感触が数秒すると、クロウさんの手が離れて魔法陣を展開する。
「記憶から座標を読ませて貰った。なるほど、お前らが堕天使に所属していたのなら、そうなったのも頷ける。では行くぞ」
そう言って私たちは魔法陣の光に体を包まれていった。

来訪・女王と大英雄ＩＮ堕天使の組織

冥界に存在する堕天使の組織、神の子を見張る者（グリゴリ）にて…………

「一瀬ええええええええ!!何処だあああああああああああああ!!??どこに居るんだあああああああ!?」

「落ち着けアザゼル!?ゴミ箱を漁っても一瀬は出てこないぞ!」

「一瀬いちせいちせいちせいちせいちせいちせいちせいちせいちせいちせいちせイチセイチセイチセイチセイチセイチセイチセイチセイチセイチセイチセイチセ…………」

『ひぃ……!!誰かヴァーリを眠らせてくれ!さっきから壊れたレコードのように一瀬の名前を繰り返しで喋ってるせいで、俺が精神崩壊しそうだ!!一瀬えええええええ無事でいてくれえええええ!!』

「心配なのは大いに分かるけど………凄いカオス………」

「落ち着けと言っても無駄なんだろうな」

「呼ばれてやって来たは良いんですけど…………これ、どういう状況ですか……?」

とんでもないことが起こっていた。
その理由は、一瀬が行方不明になったからで、神の子を見張る者の中でも一瀬の存在を知る者はほとんど狂乱状態だった。
特にアザゼルとヴァーリがヤバかった。
アザゼルは土を掘ったりゴミ箱を漁ったり全ての部下に捜索命令を出そうとしたり……普段の彼なら絶対に有り得ないことだった。
コカビエルですら外部に連絡させないことでしか抑えられ無い状況でいた。
そしてヴァーリは部屋の片隅で体育座りしながら、親から虐待を受けていたときよりも黒いオーラが漏れて延々と一瀬の名前を呟いていた。
それを神滅具（ロンギヌス）に封印されたせいでずっと聞く羽目になったアルビオンはもう聞きたくないと必死で周りに懇願していた。
二天龍がここまで恐れる程にヴァーリはヤバかった。
そして、それ程混乱はしていなかった、伝えに来たオリバーは逆に冷静になっていき、偶々アザゼルの部屋にいたバラキエルは呆れ、最近やって来た十三種しか無い神滅具（ロンギヌス）の一つである黒刃の狗神（ケイニス・リュカオン）の保持者、幾瀬（いくせ）鳶雄（とびお）は訓練中に突然の呼び出しを喰らって急いでやって来たは良いものの、剰りにも室内がカオスすぎてーーーー主に二人だけだがーーーーどうすれば良いか混乱し始めた。

実はこう見えても時間は一時間以上経っており、一部の部下に神器保有者が一名行方不明になったと言うことで詮索はしてるものの一切の音沙汰なしで段々と不安に呵まされ、アザゼルとヴァーリが壊れ始めていた。

自ら探したいが、仮にも組織のトップがそんな事すれば、ただでさえ部下にも存在を隠してるのにそのせいで他勢力にも一瀬の存在がだんだんと広がってしまう。

ヴァーリも同様で、アザゼルの懐刀であるヴァーリが動けばアザゼルと、同じ状況になってしまう。

そんな動けない状況でもし一瀬が……と考えてくウチにネジが何処か行った。

オリバーやバラキエルも確かに心配ではあるが、アザゼルとヴァーリにはとにかく落ち着いて欲しかった。

そうしなければ真面目に会話することも適わないからである。

だが、そんな時に彼らの部屋に一つの魔法陣が現れた。

誰も見たことの無い文字が羅列されており、壊れかけていたアザゼルがやっと正常に戻って、その文字を見つめる。

だが、神器（セイクリッド・ギア）の研究でそれに触れたことのあるアザゼルはそれに気づき叫ぶ。

「馬鹿な…！古代ルーン文字だと……!?」

古代ルーン文字。

それは一般に知られるルーン文字とは違い、ケルト神話勢力の中でも一部の者しか知らないと言われているもの。
だが、それを自由自在に扱う人物をアザゼルは一人だけ知っていた。
その名前を言おうとしたとき、魔法陣が突一層輝き、風が部屋の中に入り込む。
全員が腕で顔を防ぐも光のせいで目が開けられない。
そんな中、一人の女性の声が聞こえる。
「久しいな、総督殿。妾が会いに来てやったぞ」
ケルト神話に登場する異界の国、〝影の国〟。
そこを統べる唯一無二の女王……その名を
「何の用だ？スカアハ」
「そう警戒するな。同盟関係を結んでる我らの仲じゃないか」
ケルト神話が出した、かの大英雄クー・フーリンの師匠にしてケルト神話勢力の中でも唯一、主神ルーに手傷を負わせることが出来る存在である。
深紫色の長髪に紅蓮の瞳。
百人中百人が彼女を美女と言うであろう蠱惑的に美しい女性で、その身は女王の威厳を示すように己の髪と同じ、深紫色のドレスで包んでいた。
その後ろには黒い短髪に蒼い目と獰猛な顔つき、首からマントを着ているが、その下

から見える上半身は裸で、その見える顔に少しの、上半身には無数のルーン文字が描かれており、下半身には狼の皮でできたパンツを履いている。

そして、何より特徴的な紅い槍。

ケルト神話が代表する伝説の武具の一つ、〝ゲイ・ボルグ〟。

それだけで、その正体は嫌でも分かる。

その槍を持つ者は世界でもたった一人。

ケルト神話どころか世界にもその名を誇れる大英雄クー・フーリンその人だ。

アザゼルが警戒したのは、スカアハが何故そいつを連れてきたかということ。

スカアハはその問いに応える。

「何、ルーからの頼み事でな」

「ルー？主神がワザワザお前にまで頼んで来るとは……何かあったのか？」

ルー。

ケルト神話最強の神で、クー・フーリンの実の父であり、その強さは世界でも一桁に迫る程である。

そんな大物がいくら同盟を結んだからって、格下であるはずの自分に頼み事をするとは、アザゼルは露ほども思いもしなかったからだ。

「まあ、そこまで大事では無いのだがな。そもそも私じゃ無くても良かったわけだ。目的はこいつをここに連れてくる事だけが目的よ」

「……そいつはお前らの大切な秘蔵っ子だろ？何があった？」

「未来を見れる魔眼を持つ知り合いがいてな。その者が、ここに我らの負の遺産がやって来ると言ったのだ。ルーはその情報を聞き、念の為と同盟の証と言うことでセタンタをここに置こうと考えたのだ」

アザゼルは考える。

ケルト神話が言う負の遺産……。

邪神か…？

否、それらはだいたいルーによって滅ぼされている。

なら、怪物か？

グリードやコインヘンという神でも苦戦する化け物はいたが……そこまで来てアザゼルは答えに辿り着いた。

その答えは

「三日月の暗黒龍（クレッセント・サークル・ドラゴン）クロウ・クルワッハか……！」

「如何にも」

その名は邪龍最凶としても有名で、数ある邪龍の中でも筆頭格の存在だ。

邪龍特有の戦闘狂の性格のせいで数々神が彼の痛い目を見せられたという。
ケルト神話は気が付けばクロウ・クルワッハは姿を消していて、今も捜索は続けられていたらしい。
それが、堕天使に何の用だ……!?
「だが、どういう事だ…?」
「それは分からぬよ。だから、こうしてセタンタを連れてきたのでは無いか」
セタンタというのはクー・フーリンの幼名である。
スカアハは短い此方の方が気に入っているため、いつも其方で呼んでいる。
その本人であるクー・フーリンは先程から黙ってはいるが、どこか不満そうだった。
自分より強い人には仕方なく許しているが、それ以外の者には許してはいないのは簡単に察していた。
次にアザゼルが何故スカアハがここに来たのか理由を聞こうとしたとき、先にスカアハが口を開いた。
「ところで、先程から部屋の隅にてイチセと繰り返し呟いてる白龍皇は何があった?」
どうやら、ヴァーリがずっと体育座りなのが気になっていたらしい。
ヴァーリ……かなりの重症である。
「悪いな。そいつと仲の良い奴が行方不明になって心配すぎてあーなった。いつもな

らもう少し落ち着いてるんだがな……すまんな」
「（お前さんもさっきまで同じじゃったやけぇ!!離すんじゃバラキエルうううう!!）」
「（すまない。今はダメだ。後で解放するからオトナシクしてくれ。本当に頼むから!!）」
コカビエルが我慢の限界だった。
さっきまであれ程狂乱していた奴が急に冷静になったことに、理解はしてるが納得できなかった。
コカビエルは今にも特大の光の槍を撃ち出そうとしていたので、バラキエルが必死に抑えていた。
バラキエルの心労は止まらない。
「俺ここにいて良かったんですかね……」
「大丈夫だと思いますよ。遅かれ速かれ伝わってここに来ることになってたと思うので」
鳶雄は自分がこんな大事そうな話を聞いても大丈夫かと不安に呟くも隣にいたオリバーから問題なしと返された。
寧ろ不安だったのはオリバーの方だった。
彼は各神話勢力どころか己の組織にすら極力バレないように隠されていた神滅具保

有者なのだから。
既にこの場には神滅具保有者が三人もいるが、全員がまだ戦闘経験が浅い者ばかりだ。
ヴァーリは戦闘経験はこの中で一番あるものの、大英雄であるクー・フーリンに比べたら軍人と生まれたての子犬ぐらいの差がある。
今すぐにでもこの場を去りたいが、下手な行動を起こせば神滅具保有者全員が一瞬で殺されるかもしれないのだ。
いくら同盟を結んだからと言って殺されないとは誰も言っていない。
それに、彼らは原作には出てこないキャラクターでどんな力を持っているか一切不明なのだ。
そもそもケルト神話自体出て来たのはバロールの名前とクロム・クルワッハぐらいなのと主神であるルーが上位１０位程の強さを持ってることしか情報がない。
オリバーは少しでも彼らがどんな力を持っているのかを見極めようと、この場に残る道を選んだ。
だが、そんな時に一人のノックもせずに男堕天使が入ってきた。
「失礼します！アザゼル様、大変です」
「あ？なんだ？」

アザゼルがその男堕天使に若干殺気を放ちながらも、その内容を聞こうとした。
恐らくそれは、無礼を働いた事への注意なのだろう。
男はそれを理解はしてるし、部屋にいる見知らない人達は誰なのかと疑問に思うが、今はそれどころじゃないとアザゼルにその内容を伝える。
「アジ・ダハーカとアポプスを名乗る者がアザゼル様に面会を求めてます!!」
だが、その内容はこの場にいる全員の空気を凍らせるのに充分だった。

混沌・特定不可

神の子を見張る者（グリゴリ）本部にて、一人の堕天使と二人の男が歩いていた。
前に堕天使がいて、二人の男を案内するような形だ。
いや、実際に案内してる。
それも絶対に粗相の無いように気を配りながら……。
何せ、そうでもしなければ自分が消されるかも知れないからだ。
自分が案内している二人に。
堕天使は幹部とは行かないが上級堕天使の中でも実力は上の方で、幹部とも何回か会うことの出来る程の人物だ。
だが、そんな彼がビクビクしながら行けないのは、その男二人の正体にあった。
「ここが堕天使共の本部ってか。強い奴はいるか？」
「……寄せ。今回はクロウの顔合わせだ。殺されるぞ」
「分かってるっての。下見ぐらい良いじゃねえか」
「……ただの下見ならな」
一人は黒と紫が混ざり合った髪に金色の瞳を持ち、まるでヤンキーのような顔つきだ

が紳士服を着ている男、もう一人は銀に少しだけ混ざった黒がある髪に銀の瞳、褐色肌に冷徹さを纏い祭司服を着てる美青年だった。

彼らの名は「魔源の禁龍（ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン）」アジ・ダハーカ、「原初なる晦冥龍（エクリプス・ドラゴン）」アポプスと言い、邪龍という各神話勢力ですら危険視している者達の中でもその存在の筆頭格と呼ばれるのが彼らだ。

そんな彼らの今のリーダーが邪龍最凶と言われる三日月の暗黒龍（クレッセント・サークル・ドラゴン）クロウ・クルワッハだ。

彼らはクロウ・クルワッハに呼び出されてここ、堕天使の組織である神の子を見張る者に来ていた。

そして、一人の堕天使が案内役としてこうしてその二人の前を歩いてるのだ。

この堕天使……哀れである。

「よお、堕天使。後どんくらい歩けば良いんだ？」

「は、はい！後1分も掛かりません！」

「サンキュー」

アジ・ダハーカは軽い気持ちで声を掛けたが堕天使は一言話し掛けられるだけで心臓がバックバックなのである。

その証拠に彼らからバレないようにしてはいるが実は冷や汗だらだらだった。

ちなみに、アジ・ダハーカとアポプスは臭いでそれに気付いてたりするが、自分達の存在がどういうものか理解してるため敢えて言わなかった。

そして、本当に1分もしない内にトップであるアザゼルがいる総督室に着いた。

堕天使がその部屋のドアをノックして自分の名前と用件を言うと、中から渋い男の声が聞こえて許可が降りた。

堕天使がドアを開けて後ろへ下がったためアジ・ダハーカが先に部屋へ入ろうとしたとき、紅い何かが己の顔の目の前に迫ってるのが見えた。

かなり速いが避けられない程じゃないので首を横に逸らすだけで躱す。

だが、それだけで攻撃は終わらず連続の突きが彼を襲うが、彼は余裕で躱しきって見せた。

攻撃が終わったかと思うと、今度は手の平に魔力を集めてそれを相手に打ち出そうとしたとき……

「そこまでだ、セタンタ。下がれ」

威厳のある女性の声が聞こえ、その声が聞こえた途端その紅い槍の持ち主は後ろへ跳び下がった。

先程自分に攻撃したのはセタンタと呼ばれる黒髪の青年のようだが、彼はその前にいる主の命令らしかった。

主は深紫色の女性で、ソファに優雅に座っていた。
アジ・ダハーカは怒り混じりに総督であろう部屋にある机にいるアザゼルに文句を言う。
「よお、ここは客人に随分と物騒な挨拶をするんだなぁ？礼儀を知らないんじゃねえか、あ？」
「それはすまねえな。だが、滅んだと言われている邪龍の名を聞かれて警戒しない方がおかしいと思わないか？」
「あ？」
「……待て、アジ・ダハーカ。……まだ伝わっていないのだろう」
「嘘だろ!?旦那は何やってるんだ？」
『？』
アジ・ダハーカの言葉に部屋にいた全員は首を傾げる。
本当に知らない様子の全員にアジ・ダハーカは口を開く。
「俺らはクロウの旦那に世話になっててな。堕天使の総督と話したいことがあるって聞いたからよ、こうして会いに来たんだが……てっきり先に来て説明してるもんかと思ってたぜ」
その言葉にアザゼルは密かに冷や汗を掻いた。

本当に邪龍最凶のクロウ・クルワッハがここに来るのが現実に成るとは予想はしてたが、なっては欲しくは無いと思ってたからだ。
だが、此方は彼方に何かした記憶はない。
部下が何かしたとしても、邪龍最凶がここに来るまでのことを仕出かすとは思えなかった。
そして何より、血は繋がってないが愛娘のように可愛がってる兵藤一瀬が行方不明の状況でどうしてこうも面倒事が連続してやって来るのか分からなかった。
何としてでも一瀬を探したいのに、ケルト神話の重鎮と下手したらここを滅ぼす可能性を持つ邪龍の筆頭格にいる二体。
そして、後でその二体を従えてる邪龍最凶のクロウ・クルワッハが来るという報せを聞いてアザゼルは後少しで胃に穴が空きそうな思いだった。
アジ・ダハーカはここで疑問に思ってたことを口にする。
「それで?そっちの自己紹介はなしかよ?俺らだけ知られてるってのは理不尽じゃねえか?」
「……あ、ああ、そうだっな。俺の名はアザゼル。ここの総督だ。そんで後ろにいるのが幹部の……」
「コカビエルだ」

「バラキエルという。よろしく頼む」
「そんで、部屋の隅にいる銀髪の子供がヴァーリだ。その近くに居るのが、金髪がオリバーで黒髪が鳶雄だ。俺の用心棒みたいなもんだと思ってくれて良い」
「……ほう」
「そして……」
「そこは妾がしよう。妾の名はスカアハ、影の国の女王だ。先程はすまなかったな。ああ、後ろにいるのはセタンタ。クー・フーリンと言ったほうが分かりやすいか？」
その名前を聞いて固まるアジ・ダハーカとアポプス。
まさか、挨拶のつもりで来ただけなのに、自分達が世話になってる者と同じ出身な上に敵対関係にいる者達がいるとは想像も着かなかったからだ。
これには邪龍の筆頭格も驚きである。
「……マジか」
「……どうする？」
下手すればここで戦争が始まる…。
それを悟った邪龍らはどうすれば良いか分からなくなった。
アポプスがこっそり連絡しようにも何故か繋がらなくなり、二人は頭を抱えたくなった。

そこで、スカアハが彼らに問う。
「お前達はあの馬鹿者とはどういう関係なのだ？」
「……封印されてた私たちをアイツが解いたのだ。……それ以来、恩に報いるために一時的な主従関係だな」
そう言ったのはアポプスだ。
その言葉に驚いたのはアザゼルだった。
彼らは滅んだと言われていたが、実際には封印されてたと言う。
しかもそれを解いたのが邪龍最凶だ。
もはや厄介ネタでしかない。
「あの馬鹿者がの……。解いた理由は聞いておるのか？」
「気紛れと言ってたな」
スカアハが少しでも情報を得ようと質問するが、アジ・ダハーカはあっさりと返してきてきた。
ぶっちゃけて言えば、アジ・ダハーカは別に知られてはいけない情報などない。
悪事は復活してから何もしていなく、何か企んでいるわけでも、誰かに与しているけでもない。
○ｏｕＴｕｂｅｒとして人間界でゲームにハマって平和に暮らしてるだけなのだか

ら。
「あの者が何の目的も無くお主らを復活させるとは思わないのだがな……」
「……昔を知ってるなら納得するが、今のアイツはかなり丸くなったからな。…人間界と魔界で修業に明け暮れてるぞ」
「マジかよ……。何も感じなかったぞ」
「だろうな。旦那は今となっては俺らですら話にならない所まで行ってる。お前程度じゃ感じるのは必至になんない限り無理だろうな」
「お前達二人がかりでも無理なのか……？」
「この間やってみたが、ありゃダメだ。確実に全盛期の二天龍を越えてんぞ」
『なっ！』
これには流石のスカアハも驚きで、クー・フーリン意外は皆声を出して驚いた。
クー・フーリンも驚いてるが、基本無口なのであまり声を出すことが少ないので周りに伝わっていないのは残念なところである。
アジ・ダハーカは続ける。
「まあ、安心しろよ。クロウ旦那もあんたらに喧嘩を売ったりはしないと思うからよ」
「……そうだな。私たちもお前達と争うつもりはない」
「未だに信じられんが……嘘を吐いているわけではなさそうだ」

アジ・ダハーカもアポプスも戦う意思は無いと宣言する。
スカアハは二人とも本当のことを言ってるようにしか見えなかった。
それはアザゼルも同様で、次に質問をしようとしたとき……ヴァーリが突然と立ち上がった。
「は⁉一瀬が邪龍と一緒にやってくる予感がする⁉」
「いきなり立ち上がったと思ったらどんな予感してんだお前は……⁉」
そう思ったら変なことを言い始めたので思わずアザゼルがツッコんだ瞬間、漆黒の魔法陣がドア付近の天井に描かれた。
アザゼルは今までに一度も見たことのないもので、いったい誰だと思ったが……一人だけ思い当たる者がいた。
その証拠に、スカアハはその魔法陣を見るなり目を細め、クー・フーリンは槍を構える。
邪龍達に関しては呆れ顔だった。
そして……
「やっと着いたか。転移魔法は中々に扱いづらいものだな」
「きゅぅ……」
『一瀬、お前は頑張った』

クロウ・クルワッハが、今代の赤龍帝である兵藤一瀬を肩に担がいて現れた。
歴史上でも極稀な混沌とした空間が完成した瞬間だった。

婚姻・堕天使の総督と影の国の女王

「一瀬!?」
「一瀬ええええええええ!!」
『良かった……本当に良かった。一瀬が無事で……本当に良かった!!（迫真）』
「姉貴?……なんでその人といんの?」
『一瀬はとんでもない奴らを引き寄せるな……』
「無事だったか一瀬。それで、隣のは誰だ?」
「おかえり、一瀬。早速で悪いが説明を求めるぞ?」
「えっと……おかえり……でいいのかな?」
「わん」
「フフフフ。アザゼル、久々に面白い事態を用意してくれたな?」
「……」
「遅えぞ旦那」
「……何をしているのだか」
「それはすまなかった。……なんでそいつらがいる?」

「えっと……ただいま……です」
『……なんだこのカオス』
お久し振りです（読者視線）。
兵藤一瀬です。
あの後（２話前の最後）クロウさんが転移でここに移動しようとしたんですけど、どういうわけか全然知らない場所を転々とされました……。
エジプトにあるピラミッドの中心部やアメリカのマヤ遺跡、パリのエッフェル塔上空……など、ある意味小旅行とも言えるようなものになりました。
改めて転移魔法って凄いんだなって思いました。
けど、休憩なしだったのと連続の転移に慣れてなかったのが災いして軽く酔ってしまいました……。
ドライグさんが途中でウンザリしてしまい、
『お前どこで転移魔法を習った？』
と聞きました。
クロウさんはその質問に
「アジ・ダハーカの魔法を見様見真似でやった」
『よくそれであの台詞吐いたな貴様』

と答えて、ドライグさんが半ギレでクロウさんと口論が始まって……ここに来る二つ前のイスラエルにあるエルサレムに転移した時にやっと治まりました。

というか……見様見真似で魔法って出来るんですかね？

この間授業で習ったんですけど……少ししか覚えられませんでした。

ヴァーリ君は私の倍は覚えてたけど、クロウさんは天才なんですかね？

あ、現実の話に戻りますが、クロウさんから降ろされた後（肩に担がれて転移してきた）、ヴァーリ君とアザゼルさんから抱き着かれました。

抱き着かれたときに思わず変な声が出ましたが、二人はそれを気にせずに未だに抱き着いてきます……。

こういうときにいつも止めてくれるコカビエルさんとバラキエルさんはクロウさんに詰め寄ってて無理そうで……どうしようかなと思ってると紫色の髪を綺麗な女性が諌めてくれました。

「これアザゼル。親バカを見せるのは構わないが説明をせんか。セタンタにお主の○○にゲイ・ボルグを突き刺すぞ」

「!!?」

「説明するからそれは辞めてくれ……。死ぬから…色んな意味で」

……？

何て言ったんでしょうか…？

「お主の」と言った先の……名詞らしきものだけがノイズが走って聞こえなかったです。

ドライグさんは聞こえましたか？

『お前にはまだ速い』

あ、聞こえてたんですね。

けど……まだ速いってどういうことですか？

ノイズが走るまでの言葉ってなんですか!?

……今更ですけど……誰ですか…？

「あー、そういやどっちも説明がまだだったな。とりあえず、スカアハ。こいつは兵藤一瀬。今代の赤龍帝だ。そんで一瀬。こっちの紫色の女がスカアハ、後ろにいる黒髪の野郎がクー・フーリンだ。どっちもケルト神話に所属していてるお偉いと言ったところだ」

「は、初めまして。兵藤一瀬です」

『知ってるとは思うが、ドライグ・ア・ゴッホだ』

「うむ。妾はスカアハだ。よろしく頼む」

「……（軽く頭を下げる）」

綺麗な人……。

全身が紫色で、それが同じ色の髪に似合っていて……少し羨ましいと思いました。

スカアハさんのような人に色んな女性は憧れるんだろうな……。

クー・フーリンさんは少し怖い雰囲気ですが、たぶん悪い人じゃ無さそうです。

直感でしょうか？

そんな感じの口では言えない何かがそう囁いてる気がするんです。

すると、スカアハさんが此方へ来て頭を撫でる。

「この歳で既に禁手（バランス・ブレイク）にまで至っているとは……余程のことがあったと見える。

……妾のことは母と呼んでも良いぞ？」

「お母……さん…？」

「（ズキュン）」

『ん？』

「アザゼル」

「……なんだ？」

「結婚しよう」

『ふぁ!?』

スカアハさんの言葉に全員が驚いています……。
あれ!?
え、ちょっと……は!?
待ってください！
どうしてそうなったんですか!?
「えー……姉貴は女神も墜とせるのかよ……」
『凄いな。神に嘘は吐けないと聞くが、逆に純粋無垢な子供の言うことは神には効果覿面なのかもしれぬな』
「え？待って。原作読んでたけどそんなん知らないんだけど……？……あれぇ？原作にあったかな……？」
レグルスさんとオリバー君が何か話してましたが、何も内容は聞こえる状態じゃ無かったので後回しにしようと思います。
スカアハさん、何があったんですか？
アザゼルさんも何かを言っています。
「俺から一瀬を取れば戦争になるのを見越して、どうすれば合法的に一瀬と触れ合うか考えた結果がそれか」
「フフ。そう睨むな。それに同盟の証と言うことでも良いでは無いか？」

「まだ速いわ。悪魔と天使共にバレないようにして来た事が全てパアになる。……全て終わってからなら良いがな」
「フフッ。拒まない其方が妾は愛おしいぞ」
「ほっとけ！」
……。
えっと……？
「コカビエル、今夜は赤飯だ」
「分かった。チキンビリヤニも出しとこう」
※チキンビリヤニ……北インドやパキスタンの祝いの席で出される、日本で言う炊き込みご飯のようなもの。
「俺も手伝った方が良いか？」
「鳶雄さんの料理おいしいですもんね。俺も手伝います」
『我が食えないのが残念だ』
「待て待て待て待て!!お前ら!」
特に驚いた様子もなく、成り行きを見ていた男性陣はお祝いの品を出そうと計画をし始めた。
それにアザゼルさんが待ったを掛ける。

しかし、面々は首を傾げる。
『？？？？？』
「揃いもそろって首を傾げんな！まだするわけじゃねえんだぞ！」
「まだ……ということは」
「フッ。隠す気が感じられないな」
『ほう。アザゼルと影の国女王がか。今世はとても愉快になりそうだ』
『クックック。初めて貴様と意見があったな、赤いの。私もこれからが楽しみになってきた』
「おいこら二天龍コンビ！お前らも茶化すな！」
いや……ねえ？
いつの間にか離れていたヴァーリ君と目を合わせると、お互いに頷いて言う。
「アザゼルさんが満更でも無さそうだったので……」
「本気で嫌なら、女王の顔があそこまで幸せそうにはならないだろう？」
「はあ!?……」
「ん？どうした？我が夫よ」
私とヴァーリ君の言葉にアザゼルさんがスカアハさんがいる方向へ勢い良く振り向くも、これでもかと言うほど幸せそうな顔をしていて、アザゼルさんは何も言えなくな

りました。

けど、それ以前にスカアハさんの視線がチラチラとアザゼルさんに行ってたり、隙あらばとアザゼルさんに近づこうとしてたのでもしかしたらと思ってたので……あまりそのこと自体には驚いてはいないんですよね、私。

ただ、この時にしたことに呆然とはしちゃいましたけど……。

だから、満更でも無い様子を見て私たちはアイコンタクトでハイタッチする。

『パアン！（無言でハイタッチする堕天使陣営）』

「……親父。俺だ。祝いだ」

『やっとか！今から……はダメか。なら、アザゼルとの約束が終わり次第挨拶に行くからな。そう伝えとけ！あばよ！』

「了解」

『了解』じゃねえよ！内容まる聞こえだわ！喋んないなと思ってたら何速攻でルーに電話してんじゃねえよ！」

「??」

「首を傾げんな！」

アザゼルさんのツッコミが止まりません。

あれは照れ隠しですか？

恋愛ゲームでああ言う感じのツッコミを炸裂させていたヒロインがいたので、恐らくそう言うことなんでしょう。
アザゼルさんが幸せなら、私も幸せです。
スカアハさんも悪い人じゃ無さそうですし、問題ないのでは？
そう考えてると、スカアハさんがアザゼルさんに言う。
「妾じゃ不満か」
「……別にそうじゃねえが」
「なら良いでは無いか」
「……」
自然にいちゃつき始めました。
ヴァーリ君がそれを見て……今まで見たこと無い表情をしてました。
感情が……読めません…。
何を思ったらそんな……無とも言えるような顔をしているんですか…？
オリバー君は爆笑して、鳶雄さんは普通に硬直してました。
コカビエルさんとバラキエルさんはもういなくて、間違いなく食材調達に行きましたね。
はあ……。

カオス具合が……酷くなってる気がします…。
これから、どうなるのでしょうか…？

「我らが蚊帳の外に追い出される日が来るとは思わなかったぞ」
「こんときぐらいは良いんじゃねえの？めでたい事じゃねえか」
「……平和も悪くないものだな」

３年後、会合・各神話の代表と一人の悪魔

とある場所、壁も床も全て真っ黒な空間がそこにはあった。
何も無いように思えるが、不思議なことに大きな白い円卓と椅子があり、そこには既に複数の者たちが腰を掛けていた。
これだけなら、何処かの重鎮達による会合に見えるだろう。
しかし、座っている者たちは全員が人どころかあらゆる生物を超越する存在である〝神〟と呼ばれる者たちの中でも主神や最高神と呼ばれる、各神話体系の代表達だった。
ここは先に着いた者から教えていこう。
一人目、「長腕」、「百芸に通じた（サウィルダーナハ）」の異名で有名なケルト神話の主神にして太陽神のルー。
その容姿は、荒っぽい雰囲気の年若い青年で、橙色の瞳、絹糸のように白い短髪に森と同じで深緑色の中世の狩人のような格好をしている。
その実力は世界でも一桁に届きうる強さを持っている。
ちなみに、彼がアザゼルと同盟を結ぼうと思ったのは妹のように可愛がってるスカア

ハが彼に惚れていたのと、既に昔にそう言う関係だと知っていてアザゼルの性格を個人的に気に入ったという理由である。

この主神、かなり勝手である。

二人目、五分刈りの頭に丸レンズのサングラスにアロハシャツ、首には数珠というラフな格好をしている筋骨隆々の男。

アロハの隙間から見える素肌からその身体が鍛え抜かれてる事が分かる。

彼の名は帝釈天、又の名をインドラ。

インド神話と仏教に通じる二つの名前がある、恐らく今回集まった者の中で、戦の神であることから最も戦闘狂であろう神だ。

実際に彼の強さは世界でもトップ５に入るほどである。

今回の話に彼が乗った理由は昔からウザく感じていた聖書陣営を滅ぼせるチャンスが来たという理由だからだ。

三人目、間違いなくここに揃った神々の中でも有名な神の一柱、名をゼウス。

その格好は王冠とトーガを身に纏っている中年の男性だが、ギリシア神話の最高神にして天空をも司る神である。

実力は一桁に惜しくも入れないものの、ルーとそんなに順位は変わらない程である。

自身の弟であるハーデスがトップ１０に入ってるのを気にしてる。

彼がここに来た理由はアザゼルとは個人的に親交があったために、友との役目を果たそうとしたからである。

……彼がいなくなれば、お気に入りの店に行けないという不純な理由もあったりする。

四人目、日本の侍のような薄紫色の着物を纏い、腰には2本の禍々しい刀を差しており、真っ黒な長髪を後ろ髪で纏めている綺麗な顎髭を生やした、垂れ目な黒い瞳を持つ壮年の優男。

名を天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）と言い、日本神話の〝造化三神〟という日本神話の中でも最も謎が深き至高神である。

彼又は彼女らーーーー造化三神と別天津神（ことあまつがみ）という原初の神には性別が存在しないために断定はできないが今後は〝彼〟とするーーーーは天地開闢の後に姿を隠したと伝えられてきたが、実際には他勢力からの侵攻に目を光らせていた。

しかし、ある事情のために目を離していた隙に聖書勢力の悪魔と天使が駒王町を占拠し、勝手に領土としていたために三大勢力自体を嫌っていて、本来なら4年前のある日に訪問してきたアザゼルの話を聞く気は無かった。

しかし、堕天使だけが唯一駒王町に関係してないのと、勝手に好き放題している悪魔と天使を滅ぼさないかということもあって不可侵条約を結んだ。

五人目、白く長い顎髭を生やした方眼鏡をかけた特徴の無い服装をしている老人。
彼の名はオーディン。
北欧神話の主神で戦争と死を司っており、それとは別に詩文や魔術にも長けてることでも有名な神だ。
また、知識を得るためになら己を身を差し出せと言われても喜んで犠牲になるような、知識に貪欲な神としてもよく知られている。
彼は本来なら和平を好むが、この世界では悪魔がやらかしたせいで悪魔・天使滅すべしと今回参加してきた。
ちなみに、アザゼルとゼウスとは飲み友で、ゼウスと同じような理由で来ていたりもする。
六人目、赤色と青色の毛が入り乱れた頭髪はぴったりと固めて、切れ長の両眼は右が赤で左が青というオッドアイの紳士服を着た中年男性。
彼の名前はメフィスト・フェレス。
『番外の悪魔（エキストラ・ナンバーズ）』という七十二柱にも名前が載っていない悪魔だが、貴族階級の者である。
こう簡単に言ってはなんだが、彼は悪魔である。
そう悪魔だ。

これから滅ぼそうとしている者達と同種族で、ぶっちゃけて言えば何故ここにいることが許されているのかが謎な程だ。

しかし、その理由はこの場にいる誰よりも彼の存在が重視されているためである。

何故か？

それは彼が悪魔陣営をとっくに裏切っているのと、強力な神滅具（ロンギヌス）所有者を二人も保護していること、そして、既に悪魔陣営と天使陣営の裏切っている者を全てが終わった後に彼が保護するためだ。

確かに、ここに集った神々が力を合わせたら悪魔陣営も天使陣営も滅ぼせる。

しかし、神々は己の勢力の手の内をそう易々と明かしたくは無い。

その不安を取り除くためにいるのが、メフィスト・フェレスだ。

実はアザゼル、何人かの悪魔と話をつけており、行動を移す際の内側からの破壊工作と、情報収集を依頼してる。

しかし、滅ぼした後にその者達は居場所を失うので、メフィストが営んでいる灰色の魔術師（グラウ・ツァオベラー）と神の子を見張る者（グリゴリ）が同じ三大勢力とよしみと言うことで協力して保護するためにこうして、長年の付き合いのあるアザゼルの考えに賛同してここにいる。

総勢６名、各勢力の代表が円卓を囲うように座っていた。

帝釈天がメフィストへ話し掛ける。

「お前さんはここに来てよかったのか？後悔するかもしれないＺＥ？」

「構いません。初代魔王と相容れなくて冥界を離れた身ですが、今の魔王達とも仲が良いというわけではありません。契約しているにも関わらず、我が部下を乱暴を働く者もいるので……正直に言えば、我慢の限界でした。後悔するかもしれませんが、未来に生まれる希望と比べたら充分です」

「同意するぜ、メフィスト。俺も自慢の槍をぶち込んでやりてえからな」

「お主の槍一つであいつら壊滅せんかの？儂のグングニルよりヤバいのが四つもぶち込まれるとか……あっちに同情するわい」

帝釈天は同じ悪魔で実は裏切るのではないかと疑ってたために今の質問をしたが、彼が答えてる時の瞳の奥には怒りの感情が隠れていたのが見えたのだ。

彼はそれで今の問答に満足したが、ルーがその意見に賛同し、その内容にオーディンが呆れながらツッコんでいた。

帝釈天は、軽いなこいつらと内心で小さくツッコんでいたが、恐らく彼らの下っ端が見れば卒倒するような光景なのは間違いないので帝釈天の思ってることは間違ってなかったりする。

なんせ、自分が信仰してる神が異教の神と険悪な空気にならずに普通に話しているのだ。

逆に何も思わない者がいる方がおかしい。
そして、そこに他の面子も混ざってくる。
「これからどうなるんだろうな？」
「そのための会議でござろう？しかし、アザゼル殿は遅いな。何をモタモタしてるのやら……」
ゼウスが今後をぼやき、天之御中主神がアザゼルがこの場にいないことに呆れる。
まあ、これほどの大物達を待たせているアザゼルがある意味大物であるが……。
しかし、その声が聞こえたかのように、アザゼルはその場に現れた。
後ろにとんでもない奴を連れて……。
「待たせてしまい申し訳ない。突然の来訪者に遅れてしまった」
「リゼヴィム・リヴァン・ルシファーだ。今回勝手ながらこの会議に参ったことに謝罪させていただきたい」
『!!』
聖書での名を〝リリン〟。
初代魔王の実の息子で、悪魔陣営の中でも三人しかいないと言われる超越者と言われる者の一人だ。
ちなみに、他の二人は現魔王である。

突然の大物に驚く一同だったが、雰囲気は不思議と落ち着いたものだった。
だが、最初に突っかかったのは帝釈天だ。
「よお、アザゼル。俺らを待たせた割にとんでもない奴を連れてきたなぁ？まさかとは思うが、そいつもなのか？」
「そうだ。こいつが自らこの場に参加したいと言ってきてな。検査した結果、何も仕込んでいないことから何か仕出かすつもりはないと判断したのと、この場にいる者達のみに話したいことがあるとのことで連れてきた」
「今、総督殿が話したとおりだ。私は今まで部下のユーグリットと共にとある事に時間を費やしてきたが……その事について話したい」
リゼヴィムは普段、巫山戯てるという言葉をそのまま体現したような人物だが、本気や真面目な時だけは本来の口調……冷徹で威厳のある口調になり、嘘のように性格が真逆になる。
むしろアザゼルにとってはこっちのほうが聞き慣れてたために、巫山戯てる時は誰だこいつ？となっていたのである。
オーディンとゼウス、ルーやメフィストはアザゼルの性格を熟知しており、彼が言っていることは本当なのだろうと思い、平和を目指している彼がワザワザ自分達に害を齎すような人物をここに寄越すなど有り得ないと考えていたために疑問の念を抱かな

かった。
それよりもリゼヴィムが話したいことの方が気になっていた。
……何故なら途轍もなく嫌な予感がするからだ。
しかし、納得していない者もいるわけで……主に帝釈天と天之御中主神なのだが、他の主神達が話を聞いてからでも遅くは無いことと、この場から逃げられないしそもそもこの場で喧嘩を売るような命知らずでは無いはずだと宥めることで、何とか収まった。
それを確認したアザゼルが切り出す。
「今回集まって貰ったのは1年後にまで迫った計画の確認、悪魔領土の分割、今後のテロ組織への対策など、色々と話すことがあっての事だが……その前にリゼヴィムから報告を第一優先としたい。リゼヴィム、頼んだ」
その言葉に気を引き締める一同。
リゼヴィムはアザゼルから促され、それに頷き一同に一歩前へと出て話し出す。
「このような機会を与えて頂き感謝致します。今回私がここに来たのは、私が昔から危惧していたことであり、現悪魔政府に見つからないように隠密にしてきた事についてお話ししたいと思ったからです。まずはこちらをご覧ください」
リゼヴィムがとある方向へ見るように一同を促すと、空中にとある画像が映ってい

た。
それは聖書に描かれていた一枚の頁。
そこにあったのは
「〝獣〟…！」
「そういうことか…」
「ここに描かれているのは、〝黙示録の皇獣（アポカリプティック・ビースト）〟６６６（トライヘキサ）。私がここに参ったのに大いに関係してあるからです」
天之御中主神が驚き、帝釈天が何かに納得した。
リゼヴィムの表情が少し険しくなり、その正体を語る。
通称黙示録の獣。
不吉な数字としてもよく知られる６６６の語源となったもの。
真なる赤龍神帝（アポカリプス・ドラゴン）グレートレッドと並べられて黙示録に語られる存在で、同等に戦えることが出来るのはグレートレッドだけとも言われている。
しかし、何故ここでその存在が出て来たのか。
ここにいる者達はそれを理解できないほどの阿呆では無い。
リゼヴィムが口を開く。
「私は魔王政府に属していたときからこの存在を探していましたが、反乱軍に敗れて

も私は辞めませんでした。しかし、約百年ほど前に見つけた……見つけてしまったのです」

一同はやはりかと納得はしていたが、その反面で最悪を想定していた。

リゼヴィムは続けて話す。

簡単に纏めると、リゼヴィムは父が〝獣〟を使って他勢力へ仕向けようとする計画を立てていて、死ぬまでも見付からなかったというのに何故存在があやふやな〝獣〟がいると確信していたのかに疑問を持ったという。

だが、幸いにも大戦時に父は死んだのでこっそりとその計画書を盗んだという。

反魔王勢力との戦争で自分以外にほとんどの仲間が死に行く中、計画書だけは絶対に渡してはいけないと思い、計画書のデータを全て消去して冥界から離れて身を隠した。

計画書も燃やしたかったがトライヘキサ発見の鍵が見付かるかもしれないもずっと保管してたらしい。

そして、世界の果てにて自分は愚か神ですらも下手すれば滅ぼされかねない程の凶悪な封印が幾千幾万と掛けられていた〝獣〟を発見したという。

今は〝こちら側〟の悪魔達に周辺を警護させて、最悪の想定にも供えて〝最悪な罠〟を仕掛けてるともいう。

現魔王のアジュカ・ベルゼブブが出てこない限り。

「私が仕掛けた罠時間稼ぎはできますが、他の者達では手も足もでないでしょう」
「なるほどのぉ。お主は儂らにアジュカ・ベルゼブブの動きに警戒しろと言うんじゃな？」
「……ええ。彼は覇軍の方程式（カンカラー・フォーミュラ）という厄介な能力を持ってる上に、技術面でもかなりのやり手で……恐らく〝獣〟の封印を解く先駆者になるのは彼でしょうから」
オーディンがリゼヴィムの言外に言ってることを察した。
悪魔勢力にそういうことに精通している者もいる。
舐めてると足元を掬われるぞ、と。
確かに、そうだ。
自分が見下した相手に舐めて返り討ちに遭った神など腐るほどおり、この中にはそう言う者はいないが部下にはいるため、誰も何も言い返せなかった。
リゼヴィムは更に続ける。
「私共は現魔王政府が滅ぶまではそこを動くわけにも行きません。今回は総督殿に無理を言って自ら説明したく参りましたが、私は戦争時に関わることができないことをご了承ください。我々は神の子を見張る者に厄介になる予定ですが、あまり表に出ることはありません。それでは、私はこれで失礼します」
そう言い終わった瞬間、彼は転移でどこかへと去って行った。

それに帝釈天がぼやく。
「んだよ。少し聞きたいことがあったのにな。まあ、機会は幾らでもあるから良いか。ＨＡＨＡＨＡ！」
「拙者も話したいことがあったのだが……。また次回とするでござる」
「それはすまない。あいつもあいつで手一杯なんだ。昔から臆病な性格でな、魔王政府の頃から変わってないんだ」
「難儀じゃのぉ」
「軽いな爺さん」
「何であのクソ野郎共ーーーー初代魔王ーーーーからリゼヴィム君は生まれたんだろうね？遺伝子が仕事してないよ」
「さあな？本当は親じゃなかったりしてな」
リゼヴィムが勝手に去ったことに不満はあったが問題は何もなく。
少ししてから、悪魔・天使計画の確認と修正が行われるようになった……。

悪魔は知らない。
神々が己を滅ぼそうとしていることを。
天使は知らない。

神々を導いているのが黒翼の総督であることを。
悪魔と天使は知らずに神々の怒り買っていることに見て見ぬふりをしてきた代償を身を以て支払うときが来るとは思いもせずに……。
しかし、時は残酷にも滅びへと進んでいく。

休息・邪龍と天龍と龍王

「俺様のベヨネッタに勝てると思うな！」
「あ～！おでのワリオがぁ…」
「はどうだん……！」
「ふっ、そこはバリアで回復させてもらいます」
「ちょ、旦那!?やめ、ブーメランうぜえええええ!!」
「……モナドアーツ…撃！」
「貴様らが俺に勝とうなど片腹痛いわ！」
どうも、兵藤一瀬です。
今私はアジ・ダハーカさんとアポプスさんの動画配信の手伝いをしています。
どちらかと言えばプレイヤーというよりも実況という形で、私は実際に姿を映せないので、代わりに天の声（仮）というポジションで頑張っています。
ちなみに隣にヴァーリ君がいたりしています。
今実況しているのが、邪龍兄弟によるスマブラです。
あれから三年の内にメンバーが増えて、今ベヨネッタを使ってるグレンデルさん、ワ

リオを使ってるニーズヘッグさん、ルカリオを使ってる八岐大蛇君、ネスを使ってるラードゥンさんの四人が新メンバーとして追加され、クロウさんとちょくちょく遊びに来ては一緒にゲームをするというスタイルで、視聴者さん達にも結構人気があるんですよ。

新メンバーの人達は当然邪龍なんですが、昔に滅ぼされたらしく、魂だけが世界を漂ってたのをダハーカさんがその魂を集めて、クロウさん、ダハーカさん、アポプスさんが自分の肉体や鱗の一部を捧げて受肉させたらしいです。

それを初めて聞いたときは、何やってるんですか！って怒っちゃったけど、彼らからしたら特に何も問題は無くて傷もすぐに回復するから気にするなと言われました。

それに、私はブチ切れて一時間ぐらい正座をさせて説教をしました。

何でもっと自分の体を大事にしないのかって。

ヴァーリ君のような戦闘狂に言っても無駄かもしれませんでしたが、それでも……少しは私の気持ちも分かって欲しくて一心不乱に伝えました。

その後に私は途中から泣いてたらしく、その場に偶然立ち寄ったアザゼルさんとヴァーリ君がその光景を見て危うく戦争になりかけたらしいです。

クロウさん達が土下座しながら誤解を解いていました。

その時の私は自分のせいでヤバいことになったと思って慌てて止めようとしました

が、いつの間にかいたコカビエルさんから肩に手を置かれて
「お前は悪くないから手を出すな。非はあちらにありそうだからな」
大丈夫でしょうか？
と聞いてみたところ笑って大丈夫と言って、アザゼルさんの部屋へ行って、時を過ごした。
その後に、たんこぶが出来た邪龍の人達にたんこぶができて、復活させられた邪龍の人達がおどおどしながら、アザゼルさんによって部屋へ連れて来られた。
全員が人間形態で、グレンデルさんはチンピラのような感じで、二十代前半のような男性で、深緑色で爆発したような髪型で、吊り上がった銀色の瞳が特徴的で、黒い軍服を着ていました。
ラードゥンさんは、三十代後半っぽく、落ち着いた雰囲気の男性で、茶色の長髪に眼鏡を掛けていて、垂れ目で赤い瞳、紳士服を着こなしていました。
ニーズヘッグさんは、十代後半で坊主頭の黄土色の瞳をした人で、特徴の無いどこにでもあるような服装でしたが、あそこまで挙動不審な人は初めて見ました。
八岐大蛇君は、明らかに十も行ってないであろう少年で、黒髪に黒目で、瞳にハイライトがありませんでした。
元々、意識が無いような邪龍だったらしく、まだはっきりとした自我がないというこ

とで、あの時はまだ自分の意志で物事を決められなかった。
あの時は自分がいた国の服装を創造したということで灰色の浴衣を着てました。
彼らはアザゼルさんと話し合った結果、クロウさん達の部下として働くことになりました。
彼ら曰く、ここに自分達より格上の存在がいるからそれに従うとのこと。
まあ、邪龍筆頭格の方達がいれば、そうなりますよね……。
そして、その結果、邪龍部隊という他神話からすれば恐ろしく極まりないものが出来上がり、基本はダハーカさんとアポプスさんの動画に付き合う形で過ごしていくということになりました。
本来なら動画撮る毎に二人ずつ交代制でゲームをするこですが、今回の動画で最近発売されたスマブラＳ○ＥＣＩＡＬで誰が最強かを決めようという企画で、８人できるため邪龍の人達が全員参加でやってます。
けど、七人しかいないので枠が一つ余ってしまうのですが、今回は一人参加者がいて全部埋まってしまいました。
その参加者というのが……
「まさか、かの邪龍達と共にこのように並んでゲームをする日が来るとは思わなかった。だが、負ける気は無い！」

青いパーカーとショートデニムを来た綺麗な蒼く長い髪をした美女。
髪を後ろで一纏めにしていて、俗にポニーテールと呼ばれる髪型で藍色の瞳をしたこの人は……かの五大龍王ーーーーと呼ばれる、名のある伝説の龍の中でもとりわけ強く高潔な者達の呼称ーーーーの中でも最強とされる天魔の龍王（カオス・カルマ・ドラゴン）ティアマットその人であります。
……言いたいことは分かります。
ゲームでもかなりのモデルとなった伝説のドラゴンが凄い密集しているということは……！
※自分もウェールズの伝承に伝わる伝説の龍を宿していることと隣に同じ存在がいることも自覚済み。
ここにいる全員の異名を言いましょうか？（ヤケクソ＆混乱）
まず私に宿る『赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）』ドライグさん。
ヴァーリ君に宿る『白い龍（バニシング・ドラゴン）』アルビオンさん。
『三日月の暗黒龍（クレッセント・サークル・ドラゴン）』のクロウさん。
『魔源の禁龍（ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン）』のダハーカさん。
『原初なる晦冥龍（エクリプス・ドラゴン）』のアポプスさん。
『大罪の暴龍（クライム・フォース・ドラゴン）』のグレンデルさん。

『宝樹の護封龍（インソムニアック・ドラゴン）』のラードゥンさん。
『霊妙を喰らう狂龍（ヴェノム・ブラッド・ドラゴン）』の八岐大蛇君。
『外法の死龍（アビス・レイン・ドラゴン）』のニーズヘッグさん。
『天魔の龍王（カオス・カルマ・ドラゴン）』のティアマットさん。
……ここにはいませんが、最近アザゼルさんの研究に協力し始めた
『黄金龍君（ギガンティス・ドラゴン）』のファーブニルさん。
偶に遊びに来る斉天大聖こと初代孫悟空さんと一緒に来る
『西海龍童（ミスチバス・ドラゴン）』玉龍（ウーロン）さん。
元龍王でメフィストさんの〝女王〟である『魔龍聖（ブレイズ・ミーティア・ドラゴン）』であるタンニーンさん
……。
伝説のドラゴンのオンパレードだあああああああああああああああああ!!??
ドラゴンマニアの人達には楽園のような場所でしょうね!?
各地で名を馳せた邪龍のほとんどかいて、五大龍王のうち三人が遊びに来て、二天龍が仲良く同じ組織にいる……。
軽く一つの他神話体系を滅ぼせますね（確信）。
『現実逃避は仕方ないと思うが、そろそろ実況したらどうだ？ニーズヘッグが最初に脱落したぞ？』

はっ！
ドライグさんからつっこれました。
どうやらティアマットさんが使うパルテナに吹き飛ばされたようです。
隣でヴァーリ君が冷静に解説しています。
「ワリオがバイクで突進したところを爆炎で破壊してできた隙を付け込んで投げ技からの横強で吹き飛ばされたな。あそこはバイクだけを突っ込ませれば良かったのにな。あれはニーズヘッグの判断ミスだな」
『……』
アルビオンさんから疲労のオーラを感じます……。
やっぱりこの状況に疑問を抱いていたのは私だけじゃなかったらしいです。
アルビオンさんはツッコミしすぎて疲れたのでしょう…。
※大正解
そもそも、ティアマットさんが来たのはドライグさんが昔にやらかしたせいですしね。
ティアマットさんがドライグさんに様々なものを貸したらしいんですけど、ドライグさんが借りパクしたんです。
それで、直感で堕天使の所にいると感じてここに来たとのことです。

凄いですね、ドラゴンというのは言葉では説明できるものじゃないんですね。
そして、ドライグさん……何をしてるんですか？
『……』
人が貸したものを返さないとか……人、じゃなかった、常識としてどうなんですか？
『グハァッ!!!』
『自業自得だな。ざまあないな』
ドライグさんが耐えきれずに吐血し、アルビオンさんが鼻で笑う。
長年の宿敵である相手が惨めになったことが嬉しいようです。
今回ばかりはドライグさんが悪いので、私は何も口を挟みません。
ティアマットさんが来たときには一緒に謝ったら、私には笑って許してくれましたが、ドライグさんに対しては赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）の中に入って……後は察してください。
私では……上手く表現できません。
ティアマットさんが帰ってきた時は肌が物凄くツヤツヤしていて、ドライグさんがしばらく何も言葉を発しませんでした。
そもそも、ティアマットさんはここに無許可で転移して跳んできたわけでして、突然

の龍王の登場に神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）の幹部やアザゼルさん、邪龍の人達も慌ててやって来て、私の部屋はこれ以上にないほど騒然としましたね。

ティアマットさんが突然来たときは私も驚きましたが、この部屋には何かと突然来る人（？）は結構いますから、すんなりと受け入れたわけですけども……。

勝手に部屋に入られる私の気持ちも考えてください……。

整理とか掃除とかいろいろしなくてちゃいけないんですから…。

その後にクロウさんが突然ゲームをしないかと誘って、今現実でこうなっちゃってるんですよね……。

アザゼルさんがその前にと、ティアマットさんを連れて別の部屋へと入っていき、数分して戻ってきて、ティアマットさんとゲームをすることになりました。

何故でしょうか？

その後に私は悪魔・天使勢力にはバレるのでは？

と思って聞いたところ、アザゼルさん曰く

「一応アジ・ダハーカ特製の弱体化魔法を掛けてる上に視認ーーーー人外基準ーーーーできるかどうかのレベルで細かいところに幻覚魔法も掛けてるから、そうそうバレることは無いだろうよ。というか、ティアマットは既に人間界で有名なゲーマーらしいから、今更だな。だから、思いっ切り楽しんでこい！」

何に!?

確かにダハーカさんの魔法なら大丈夫かもしれませんが、龍王って結構自由ですね!?

※ドラゴンは気紛れで神を困らせるほどに自由な存在である。

それで、話は現実に戻りますが……あ、いつの間にか八岐大蛇君とグレンデルさんが脱落してます。

「旦那強すぎだぜ……」

「……（ズーン）」

今回のルールは5ストック制のステージは終点でやっていて、現在の状況を簡単に伝えると

・クロウさん（リンク）：3
・ダハーカさん（ルフレ）：2
・アポプスさん（シュルク）：2
・グレンデルさん（ベヨネッタ）：脱落
・ラードゥンさん（ネス）：1
・ニーズヘッグさん（ワリオ）：脱落
・八岐大蛇君（ルカリオ）：脱落
・ティアマットさん（パルテナ）：3

とうとう五人になりました。
クロウさんとティアマットさんが異様に強いです。
落とせたのがお互いと言うほどに強いです。
ダハーカさんやアポプスさんですら落とせないとは……。
よくラードゥンさん生き残ってますね……。
「おおおおおお！ヘラクレスの時のようには行きませんよおおおお！」
ラードゥンさんの生に対する執着が凄いです。
何か、トラウマでもあるんでしょうか？
※ラードゥンは生前、ギリシャ神話の大英雄ヘラクレスに口の中に蜂の巣を入れられて大量の蜂に刺されて死んだ。
ＰＫファイヤーで牽制したり、ＰＫサンダーをフルに使って突撃したり、サイマグネッドを使って回復したりと……こういうのを何て言うんでしたっけ？
……忘れました。
あ、クロウさん（リンク）とティアマットさん（パルテナ）に挟まれました。
「ちょ!?まずいまずい！」
「今こそ決着を着ける！」
「最強の座は渡さんぞ！」

「ラードゥン、哀れ」
「害悪キャラ使ってるからだろ」
クロウさんとティアマットさんはラードゥンさんお構いなしにやろうとして、アポプスさんとダハーカさんはその状況に感想を言う。
ラードゥンさんが必死で立て直そうとするも、光の柱の餌食になって決まりましたね。
ラードゥンさん、脱落しました。
「うぅ……」
「どんまい」
「……（ぽんぽん）」
「まだ次頑張ろなぁ」
グレンデルさん、八岐大蛇君、ニーズヘッグさんの既に脱落した人達がラードゥンさんを慰めていました。
皆さん、何か共感する何かがあるんでしょう…。
おっと、ここでクロウさんがアポプスさんに狙いを変えてーーーーーーーーー

◇◆◇◆◇

結果を簡単に伝えると、ティアマットさんの優勝でした。
順位は……
1位：ティアマットさん（パルテナ）
2位：クロウさん（リンク）
3位：ダハーカさん（ルフレ）
4位：アポプスさん（シュルク）
5位：ラードゥンさん（ネス）
6位：グレンデルさん（ベヨネッタ）
7位：八岐大蛇君（ルカリオ）
8位：ニーズヘッグさん（ワリオ）
と言った感じですね。
後で知りましたが、ティアマットさんは前作のスマブラの大会にて何度か優勝したこともあり、去年の上半期・下半期のプレイヤーランキングではトップ5に入るほどやりこんでたらしいです。
……人類が既に龍王と渡り合えてたことに驚きましたよ。
そして、まさか……龍王に勝てる人がいるとも思ってませんでしたよ！

案外、今の人類でも人外の存在を受け入れられそうですね。
※自分も元一般人で、その一例に入ってるとは自覚していない。
「ところで、俺たちは何で呼ばれたんだ？」
「来てから話すとしか聞いてませんから、私も分からないです。けど、戦争に関する話だと思います」
今、私たちは邪龍部隊の人たちと動画を撮り終えた後に、アザゼルさんの使いから部屋に来るように言われました。
内容は聞いておらず、部屋の中でしか話せないと聞いたので、予想しかできません。
が、こういう話は来年に起こそうと計画している戦争しか無いと思うので、ヴァーリ君にそう答えます。
それから少し雑談してる内にアザゼルさんの部屋へ着いた。
ドアを開けると当然アザゼルがいて、他には誰もいませんでした。
しかし、空気が少しだけ重く感じました。
なにか、あったんでしょうか？
「失礼します。何かあったんですか？」
「おー、来たか。とりあえず、そこに座ってくれ」
アザゼルさんがソファーを指差してそう言ったので言われたとおりに座ります。

すると、アザゼルさんが口を開きます。
「お前ら、日本に行かないか？」
『え？』
しかし、アザゼルさんのその言葉に、私たちは少し呆ける事となった……。

談義・邪龍

ある日の神の子を見張る者。

この日、アザゼルと護衛で一瀬、ヴァーリ、オリバー、八岐大蛇が日本へと対談しに行っていた。

今回は八岐大蛇で日本神話が話があるとのことで、アザゼル自身に何の非も無いが監督不行き届きでが行かざるを得なくなった。

ちなみに、他の邪龍に関してだが。

グレンデルはまず、どの神話にも属さないため放置。

アジ・ダハーカ、アポプスについてはゾロアスター勢力、エジプト神話の両勢力のどちらにも連絡はしたが返信は無く、逆に連絡も無いため……これも放置。

ニーズヘッグについては、北欧神話に連絡したところ、オーディン自身が

「いつ復活するかも分からん奴じゃったから、そっちで引き取るなら討伐する手間も省けるし全然良いぞ」

……と来たためにひとまず解決。

クロウ・クルワッハについては、ケルト神話から連絡が来て

「お前らのことだから変なことはしないだろ？クロウ・クルワッハは少し天然なところがあるから上手く共生できるだろうし全然問題ない。こっちは大丈夫だって。文句ある奴はぶっ飛ばすから気にするな」

……と、主神であるルーがそう言ってきたため、これも解決。

ラードゥンについては、ギリシャ神話が少し話し合いを行うそうだ。

今の所分かっているのは大半が別に問題ないのでは？と思ってるらしく、ヘラクレスが少し話がしたいと言うことだけだった。

問題が日本神話のみ。

それで今回行くことになったのだが、日本神話もそこまで過激というわけじゃ無いので条件を付ければ解決するだろう。

それに、今回はそのついでに一瀬、ヴァーリ、オリバー達への休暇でもあるために一週間は滞在するらしい。

その間はアザゼルがいなくても幹部達が上手く廻してくれるため問題は無い。

精々アルマロスとサハリエルの三馬鹿の内２人が暴走しないかが心配なぐらいである。

ちなみに、三馬鹿のもう一人はアザゼルである。

よく暴走するのがこの三人が集まったときなのでシェムハザがそう言いだし、神の子

を見張る者上層部の裏でこの三人の通称がそうなった。
三馬鹿はこれを聞いて不満を訴えたが、他幹部達による今までの所業を掘り返されて結果、反論できずに黙認せざるを得なくなった。
閑話休題。
今日はトップと神滅具所有者三人がいない神の子を見張る者の一日を見てみよう。

〜邪龍ズ〜
「なぁ、クロウの旦那」
「なんだグレンデル」
神の子を見張る者にある邪龍達専用の共有スペースでグレンデルがクロウに絡んでいた。
「何で旦那はあの一瀬とか言う娘と共にいようとしたんだ？アンタなら別に他の勢力でも良かっただろ？」
グレンデルは謎だった。
幾多に存在するドラゴンと比べて名前持ちの個体は少ない。
なのに、その名前持ちのドラゴンの中でも最凶と言われたクロウ・クルワッハが他勢

力に比べてこんな小さな組織で満足してるのか謎だった。
しかし、その謎を解くには解けたが更にまた謎が増えた。
それが一瀬とか言う少女のせいだ。
確かに彼女は二天龍の一角である
〝赤い龍〟ア・ドライグ・ゴッホの魂を宿した神滅具（ロンギヌス）、赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）の所有者だ。
それに、ここには白龍皇もいる。
かの名高き二天龍が同じ組織にいるという極めて稀な事態はグレンデルも初めてだった。
だが、それだけではこのクロウ・クルワッハが神の子を見張る者に降るとは考えづらかったのだ。
グレンデルは少し時間が経ち、それなりに打ち解けたついでにクロウ・クルワッハにそう聞いたのだ。
それをマリパｓｗｉｔｃｈをしながら聞いていたアジ・ダハーカとアポプスは事情を知っていたのか、あまり興味なさそうにしていた。
同じくマリパをしていたラードゥンとニーズヘッグは興味津々でそっちに耳を傾けていた。
ちなみに、クロウ・クルワッハは観戦、グレンデルは一回前にやってビリになってし

まったためニーズヘッグと交代した。
クロウ・クルワッハは少し考える素振りをした後にその質問に答えた。
「……そうだな。この際に教えておこう。俺のここ長年の目標……いや、目的は〝ドラゴンの行く末を見守る〟というものだ」
「〝ドラゴンの行く末〟……？」
グレンデルはクロウの言い放った中で疑問に思った言葉をそのまま口に出した。
クロウは続ける。
「そうだ。これからの未来にて、ドラゴンが如何にして滅ぶのか、それとも生き延びるのか。俺はそれを見たいと思ったのだ」
「それなら、旦那はどの勢力にと付かなくても良かったんじゃないか？」
グレンデルの疑問はもっともだ。
クロウ程の実力者ならば誰にも見付からずに見守ることも可能だ。
なんせ実際に誰にも見付からずに何百年と言う時間を過ごしたのだからクロウには何の問題も無い。
それなのに、こうして表舞台に出て来た。
クロウはその理由について語る。
「確かにグレンデルの言うとおりだ」

「……他に理由があんのかよ」
「……そうだ。これはアザゼルにしか話していない。アジ・ダハーカ、結界を張れ」
「お、おう」
急に真面目な雰囲気になったクロウにダハーカは言われたとおりに結界を張った。
結界を張ったら堕天使達が騒ぐのでは無いかと思うが、実はこの部屋で結界を張ることは日病茶飯事となってるために堕天使達は気にする必要がなくなった。
というより、彼らが力比べで暴れるので周囲に被害が出ないように結界を張ってるので逆に誰も近寄ってこないのだ。
ちなみに、これから話すことについてはダハーカもアポプスも聞いていないらしく、クロウの話を真面目に聞こうとしていた。
クロウは結界の強度を確認し、部屋にいる全員を見て言う。
「お前らは偽りの赤龍帝は知っているな？」
「おうよ。赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を持ってるクセにドライグの魂が無いんだろ？」
「それに加えて、何やら面白い能力も持ってましたよね？」
「た、確か、〝無限の魔力〟、〝不死〟、〝覇龍を暴走せずに扱える〟……後なんだっけ？」
「……〝変身能力〟だ。如何にも阿呆が考えた〝自分が無敵〟と勘違いしてそうな能

力ばかりだ」
「実際にその通りなんだろ？観測班が言うにはお遊び程度の訓練しかしてない上に来年をこれでもかと待ちわびてるらしいじゃねえか」
グレンデル、ラードゥン、ニーズヘッグ、アポプス、ダハーカが順々とクロウの問いに応える。
クロウはそれひ満足して頷き、話す。。
「知っていて何よりだ。しかし、ここで言っておこう」
「……なんか、嫌の予感がするのだが？」
「奇遇だな。俺もだ」
クロウが何故か嬉しそうに話し始めるのでアポプスとダハーカは嫌な予感を覚える。
そして、とうとう厄災の箱（パンドラ）が開く。
「俺はここに来る数年ほど前に、偽りの白龍皇を見掛けた」
「「はあ!?」」
「「うわぁ……」」
クロウの発言にグレンデル、ラードゥン、ニーズヘッグが驚きの声を上げ、アポプスとダハーカは頭を抱えた。
クロウは続ける。

「その時はアルビオンの気配がないから噂で聞いた〝システム〟のバグかと思った。実際に過去に何度かあったらしいからな。しかし……」

「一瀬の件で偽りの赤龍帝も出て来た」

「そうだ。神器（セイクリッド・ギア）ならともかく、神滅具（ロンギヌス）が、それも全く同じ能力を持った物が増えたのだ」

「なるほど。それは迂闊に話せませんね」

〝システム〟のバグ。

それは聖書の神が死んでから起こったいくつかの問題点。

過去に何度か起こったこともあり、例を挙げるならば亜種禁手（バランス・ブレイカー）だろう。

通常の禁手は聖書の神がそうあれと創ったために元の能力の延長線上のような強化しかない。

しかし、亜種となると能力が別方向に働き、新たな能力が付け加えられることとなる。

これは〝システム〟からしたら有り得ない現象である。

他にもまだあるが、今は辞めておこう。

ここで、ふと疑問が出て来たアポプスが切り出す。

「……しかし、何故この時に話し出したのだ？」

アポプスはこれほどの情報を伝えるには時期的に少し遅すぎることが不思議になっ

た。

クロウは、少し間を置いてから答えた。

「最近、アザゼルから嫌な報告があったのだ」

「嫌な報告？」

この時、他の邪龍達はクロウがここまで苦虫を潰したような顔を見たのは初めてだと語った。

「……新たな神滅具および他の神滅具の偽物がここ数年で十数件もの数が発見されてるらしい。事態は我らが思ってる以上に厄介になりそうだ」